

27

259-260

宗教と教育

文學博士姉崎正治著

東京博文館藏版

明治
45. 7. 16
交

序言

日本の思想界では、まだ教育と宗教とが相合ふか、相背くかなどいふ問題に腐心して居る。床次次官の三教會同に關する提案が出ると、教育家は聶々として、今更宗教の御世話にならぬと傲語するもあれば、又宗教家の中には、自分の信仰は絶対だから、他の相手にならないなどと議論し、又一般世間では政教分離といふ空言で以て事態の解決が定まつた如く言ふ。然るに、世界の思潮、否日本の實社會の思潮は、どしどしと先に進み、此等の問題を後に捨て、實利主義や自然主義に關進しつつある。今の時は、宗教と宗教とが争つたり、宗教と教育とが睨み合つたりするよりも、何よりも先に先づ、自然主義對理想主義、現實主義對超越主義の輸贏を決すべき時である。然るに

(1)

宗教も教育も、共に區々たる内輪の論争に日を送るのは、實に割據退嬰の結果、眼界が實社會に對して開けないためである。日本の國家は王政維新に依つて開國進取の方針を定め、軍事や實業は大分進取の實を擧げて來たに係らず、思想界のみは、教育も宗教も、今に尙ほ鎖國封建の夢に鎖ざされつゝあるのではないか。

教育と宗教、此の事を今更の如く論ずるのは、少し大人氣ない氣がする。然しながら林子平の海國兵談もその當時にとつては必要の言論であつたことを思へば、この一篇も亦今日にとつては必要の論題として世に出づべき使命を有して居るのである。特に床次次官の三教會同提案以來、教育家も宗教家も稍眼を覺まして、賛否共に幾何かの考へを廻らす様になつた。是れ黒船の渡來ともいふべきか。此から後公武合體とか、尊王攘夷などの論も出るべき時機ではないか。吾輩は三年前、この論題を講述し、その後稿を整へやうと

考へつゝ、そのまゝにして來たが、この機會に、世の教育家并に宗教家に眞摯な考慮を求めるために、終に此の一書を出すに至つたのである。論題と論旨とは、年來の懷抱であるが、之を整へ之を公にするに至つたのは、床次氏が大膽で又眞摯な提案の餘波である。世に此の問題について考慮する人があれば、吾も人も共に、窒息的空氣の充ちた思想界に一脈の通氣を試みた床次氏に感謝し、且つ共に俱にこの問題の正しく且つ圓滿なる解釋を得る様に勉むべきである。今日の如くに、教育も宗教も割據退嬰の中に獨善をきめ込むで居るならば、實社會はどしどし今の風潮で突進して、實利主義か然らずんば懷疑主義、自然主義か然らずんば破壞主義の勝利になつて、教育も宗教も何もあつたものでない様になるに違ひない。明治元年江戸の開城は、實に王政復古國家統一の上で、大切な一事であつたが、それも西郷南洲、勝安房二傑の潤達な達見の御蔭である。願くは、思想界にも此の如き達識の士の續

出せんことを。

下總稻毛海岸にて

明治四十五年五月十九日

姉崎正治

若しその心、念々に彼に勝れんことを欲して耐へざれば、人を下し、他を輕しめ、己れを珍とす、鳶の高く飛むで下し視るが如し。而かも外には仁義禮智を揚げて下品の善心を起し、阿修羅道を行するなり。——因果鈔。

目次

宗教と教育

一、一般の觀察

- 教育と宗教、三——二者離反の由來、四——日本の過去、五——現代の日本、七——儒佛の併立、七——武士の修養と一般人民、九——徳川時代の束縛、一〇——明治の開國と人心の解放、一二——新舊思想の衝突、一三——西洋文明の難關、一四——近世文明、一五——西洋文明と日本、一六——國家統一の問題、一八——日本の天職、一九——現在の混沌状態、二〇——道德問題、二二——藝術思想問題、二三——教育と宗教との問題、二四。

二、個人と社會

- 天然と人生との謎、二七——人間の平等相と個性、二八——個人と社會、

目次

- 二九——新時代の要求、二九——個人と社會との衝突、三一。
- 繼續性と革新性、三二——身體の繼續と革新、三三——社會生活の革新、三三——學問の積累、三四——新方面の開拓、三五——老人と青年、三六——繼續性の缺乏と狂氣、三七——繼續と革新との調和、三九——二者の消長、四〇——二者の衝突、四一——二者の圓滿關係、四二。
- 獨立と統一との増進、四三——近世文明とその將來、四五——身體構造の例、四七——統一の力と個性の力、四八——社會と天才、五〇。
- 科學の進歩、五一——藝術と天才、五一——道德と宗教、五二——獨創の事業と社會の壓迫、五三——革新的社會と形式の保守、五五。
- 社會と個人との調攝、五六——個人と社會との關係、五七。
- 教育と宗教、五八——教育の目的と個性、五八——人格の完成、六〇——宗教と個人の信仰、六一——教育の個性無視、六二——宗教の偏固、六三——宗教の社會的活動、六四。

三 國家と人道

- 觀察點、六六——文明、六六——國家の成立と成分、六七——文明と進取、

……六

目次

- 六八——國家の特質と進取、六九——文明の力、七一——確信と開國、七一——教化と感化、七三——獨善の害と傳道の熱誠、七四——文明の交通、七五——東西の交通、七五——思想の交通、七六——精神上の開國、七七。
- 國家の立場と教育並に宗教、七八——國家主義の教育、八〇——教育と利用厚生、八二——利用厚生と生活の共通、八三——愛國心、八四——愛國心と人情、八五——愛國心と自己犠牲、八七——自己犠牲と生命の共通、八八。
- 目的と手段、八九。
- 種族團結と種族的宗教、九一——王權と正義、九二——法則と國民的宗教、九三——國民的宗教と遍通の法、九五——遍通の信仰と人間の精神的自覺、九六——孔子、九七——ヘルシヤ、ユダヤ、ギリシヤの聖賢、九九
- 佛陀釋尊、一〇〇——種族的、國民的、世界的宗教の増上關係、一〇一——國民の生活と世界的宗教、一〇二。
- 傳道的精神、一〇四——共同融會の精神、一〇五——世界的傳道の經費問題、一〇七——國民の自信と外國傳道、一〇八。

目次

四、現實と理想、現世と彼岸……………二一〇

- 宗教信仰の内容、一一〇——現實の生活、一一〇——現前と隠微、一一一
- 意識と副意識、一一二——現實と理想、一一三。
- 差別相と平等相、一一三——差別と平等との融通、一一五——現實は差別相、理想は平等相、一一七。
- 平等觀念の實在、一一九——科學と平等相、一一九——先天觀念と科學、一二〇——人間の精神的交通と教育、一二一——人倫の關係、一二三——人格の差別と平等性、一二三——科學、道德、教育とその理想的根據、一二四。
- 宗教の根本精神、一二五——國民的宗教並に世界的宗教と國民生活、一二六——平等觀と差別觀、一二七——平等觀の効力、一二八——惡平等と惡差別、一二九——平等觀の感化、一二九——死に對する觀想、一三〇——平等觀と精神修養、一三一——科學と道德と宗教、一三二。
- 信仰と生活との一致、一三三——生命融會の信仰、一三四——信仰の生活
- 一三四——キリスト教と佛教との信仰、一三五——理想主義、一三六。

五、慈愛と權威……………一三八

- 無常變轉と久遠不滅、一三八。
- 親子の愛情、一三九——天地の恩德、一四一——共同生活の恩德、一四二
- 同情の生活、一四三——同情と精神の擴張、一四四——師の恩德、一四六——師弟の關係、一四六——學校以外の師弟、一四七——君王の恩德、一四九——三世一貫の德、一五〇。
- 調和の破壊とその救治、一五二——不調和の排除、一五四——慈愛の濫用、一五四。
- 慈愛恩德の秩序、一五六——法則秩序、一五八——法則秩序と理性、一五九
- 秩序權威の信順、一六〇——權威の大本、一六〇——親の權威、一六一——師の權威、一六二——君王の權威、一六三——君王の權威と臣民の忠義、一六四——王霸の別、一六五。
- 忠孝信、一六六。

〇六、個人の信念と傳來の權威……………一六八

- 人生と人格、一六八——人格の源泉根柢、一六九——事前の理とその意識、一七〇——權威と服從、一七一——權威の失墜、一七一——現實主義、一

目次

目次

- 七二——人格とその淵源、一七三——事物の源流、一七四。
- 道の淵源、一七五——建國の理想、一七六——歴史と理想、一七七——事前の理は權威の源泉、一七八——師道の廢類、一七九——師道の根本、一八〇——師弟の覺悟、一八一——君徳の淵源、一八二——君臣關係の事前の理、一八三——師主親の權威、一八四。
- 權威の濫用と無視、一八六——思想上の亂世、一八八——徳川時代の形式主義、一八九——人心の壓迫、一九〇——權威形式に對する反抗、一九一——解放と權威無視、一九二——反抗思想、一九三——西洋思想の自由主義、一九四——舊思想の遺物、一九五——官僚主義、一九六——家族中の衝突、一九七——今の民法、一九八。
- 祖先崇拜、一九九——神社崇敬、二〇〇——眞の祖先崇拜と神社崇敬、二〇一——不誠實の徳育方法、二〇二——時代の變調と狼狽、二〇三——濫用と反抗、二〇三——破壊思想と保守思想、二〇四——眞權威と信念、二〇五——眞權威と人格、二〇七。

七、日本の思想界……………二〇八

- 東西の混和、二〇八——神儒佛、二〇八——神道思想、二〇九——光明と秩序と溫育、二〇九——祖先崇拜と英雄崇拜、二一〇——種族的氣風、二一〇——支那思想、二一一——社會的徳徳、二一二——法制の整理、二一二——大義名分、二二三——儒教の長短、二二四——現代と儒教、二二五——佛敎の感化、二二五——人生の諦觀と三寶、二二六——功德回向と同情、二二六——因果の諦觀、二二七——眞言佛敎、二二八——義理の滅却、二二九——淨土佛敎、二二九——一向專念の偏頗、二三〇——禪宗と道教思想、二二二——脱俗と修養、二三二——自然主義と個人主義、二三三。
- 西洋思想、二二四——キリスト敎の信仰、二二四——人格の完成、二二五——新敎主義と近世文明、二二六——近世的社會と煩悶、二二七。
- 新舊思想の混亂衝突、二二八——混戦状態、二三〇。

八、現代文明と宗教并に教育の缺陷……………二三三

- 難關と希望、二三二——宗教と近世思想との杆格、二三二——理想主義復興の兆、二三三——新思想と信仰の源泉、二三五——誤まつた現實主義、二三七——現實主義と破壊思想、二三八。

目次

目次

科學思想、二三九——機械的説明、二三九——機械的世界觀の結果、二四一——研究的精神の衰頹、二四二——研究の精神と熱情、二四三——輕薄な科學主義、二四四——智育問題は又德育問題、二四五。

科學の輕信と宗教の盲信、二四五——神道と現代、二四七——儒教と現代、二四八——佛教と現代、二四九——キリスト教と日本、二五〇——諸宗教と教育との共通問題、二五一。

德育の根本缺陷、二五二——一貫精神の缺乏、二五三——教育社會の現實主義、二五四——人格の感化と德育、二五六——教育者の束縛、二五七——機械的教育、二五九——青年の壓迫、二五九。

人格の養成と信仰の尊重、二六一——宗教の信仰と教育、二六一。

○九、宗教と教育……………二三三

宗教と教育との異同、二六三——二者の一致と人生の兩面、二六四——方法の差異、二六五——科學の精神と實用、二六五——道德の理想と實行、二六七——宗教的道德、二六八——善惡超越、二六九——宗教的道德の自由主義、二七〇——教育の實用主義、二七一——國民教育の現實主義、二七二。

二——教育界の變風とその通氣法、二七三——宗教の讓歩とその腐敗、二七四——弊害の認別とその排除、二七五——清新の宗教家、二七六。

宗教信念とその活用、二七六——教育感化の源泉、二七七。

宗教と教育との離合、二七八——二者の分界と相互の補助、二八〇。

宗教の教育法、二八一——宗教の人格的證明と感化、二八二——眞理とは何ぞや、二八三——教育者人格の力、二八四——人格の基礎と内容、二八五——人格的感化の源泉、二八六——教育者の人格と信念、二八七。

一〇、勅教と國體と宗教……………二八九

勅語の意義、二八九——勅語の名稱、二九〇——國民教育の範圍、二九〇——國民道德の意義、二九一——教育見解の狹隘、二九二——勅語の稱呼、二九三——勅教、二九四——勅教の教たる所以、二九四——勅教と諸宗教、二九六——勅教とその精神の解釋、二九七——服膺の誠と信仰、二九八——現實主義の勅語觀、二九九。

德行とその一貫の基本、三〇〇——勅教の基本を思はぬ教育、三〇一——一貫の道とその實行、三〇二——勅教と事理雙全、三〇三——道と教、理

目次

目次

想と實行、三〇四——忠孝大本と三世一貫、三〇六——勅教と國體の觀念、三〇七——現實的國體觀、三〇八——君臣同祖説の國體觀、三〇九——強者の權利と國體、三一〇——便宜主義の國體觀、三一——建國の威徳とは何、三二二——天照大神の神徳、三二三——神武の東征、三二三——崇神天皇の宏謨、三一四——國體の精華と教育の淵源、三一五——道の生命實現、三一六——皇運扶翼の道、三一六——國體の本源と活用、三一七——國體の五重義、三一八——五義を見ざる國體觀の不備、三一九。皇室の威徳と國體の大本、三二〇——國體の地上實現、三二一——國體から生ずる教、三二二——忠孝の道と名教、三二三。現實主義の邪説、三二四——國體觀念の不備と教育の偏固、三二五——勅教と諸宗教の活用、三二六——國體と開國進取、三二七——惡思想の折伏、三二八——國體の化用とキリスト教、三二九——儒教と佛教の醇化、三三〇——東洋文明と日本の天職、三三一——開國進取と國家理想の發揮、三三二——宮強亡國、三三三——國家生命の中軸、三三三——教育者の覺醒、三三四。

信仰問題と勅教、三三四——立正安國、三三五——仁義忠孝と信仰、三三六

外篇第一、日本宗教史概観……………三三九

總論……………三四一

國民性と外國接觸、三四一——從來の三教、三四二——時代の區分、三四二——宗教と國家、三四四。

一、古代の宗教（約五五〇年まで）……………三四五

太古の信仰、三四五——古神道の神話、三四六——種族的宗教、三四八——純朴の信仰、三四九——靈魂と來世、三五〇——神道の儀禮、三五〇。

二、佛教傳來の時代（約五五〇—八〇〇）……………三五二

佛教の輸入、三五二——佛教につきての爭議、三五四——聖德太子、三五五——佛教の感化、三五七——功德回向、三五七——佛教の儀禮と美術、三五九。

奈良朝の傳道事業と政治、三六〇——聖武朝、三六一——國神の信仰、三

六二——美術、三六三。

目次

目次

三、政治の統一、宗教と文學との興隆、

(約八〇〇—一二〇〇年)……………三六四

平安朝の佛教、三六四——傳教大師の天台佛教、三六五——空海の眞言佛

教、三六六——貴族佛教、三六八——兩部神道、三六八——佛教的文學、三

六九——佛教哲學、三七一——平安朝文明と佛教の缺點、三七一——儒教

と法律制度、三七二——道徳上上下下の離反、三七八。

四、戦闘と紛擾 (一二〇〇—一六〇〇年)……………三七四

鎌倉幕府とその信仰、三七四——時勢の變化と人心の動搖、三七五——法

然上人、三七七——法然の感化、三七九——法然の門流、三七九——日蓮

上人、三八〇——日蓮の熱誠と感化、三八二——禪佛教の輸入、三八三—

—禪と武士道、三八五——鎌倉時代の佛教、三八七。

社會の瓦解と佛教の紛亂、三八八——足利時代の神道、三八九——天主教

三九〇。

五、平和と惰眠 (一六〇〇—一八六八年)……………三九四

徳川幕府、三九四——儒教と武士階級、三九四——儒教の缺陷と一般人民

三九七——心學、三九八——報徳教、三九九——佛教の整頓、三九九——

儒教中の異流、四〇〇——神道、四〇〇——國學者の神道、四〇一——所

謂る俗神道、四〇三。

六、新時代、覺醒と混亂 (一八六八年以後)……………四〇四

復古と開國、四〇四——祭政一致と政教一致、四〇五——キリスト教の進

運、四〇六——保守的反動、四〇七——國民的自覺、四〇八——佛教とキ

リスト教、四〇九——一般人民の信仰と迷信、四一〇——求道の心と煩悶

四一一——保守と急進との衝突、四一三——三教會同、四一四——西洋思

想の感化、四一五——佛教とキリスト教との相互の影響、四一六——過渡

時代の問題、四一七。



外篇第二、西洋文明の由來……………四二二

一、古代の文明……………四二三

東西文明統一の天職、四二三——物質文明と精神文明、四二四——精神的

目次

目次

融合、四二六。

ギリシヤ人の文明、四二七——自然を貴ぶ、四二七——自由主義、四二八
——共和政治の精神と神々、四二九——オリンポの大祭、四三〇——眞善
美の實際化、四三〇——プラトーン哲學の歸着、四三一——ヘルシヤ戦争、
四三二。

ローマ人の文明、四三三——政治と法律、四三三——ローマ人の統治法、四三
四、——法律は道に基く、四三四——ストア哲學の學風、四三五——四海
同胞の思想、四三六——法と道との思想、四三六——自由思想と個人主義
と法律との一致、四三七——ストア派の克己主義、四三八——ローマの武士
道、四三八——ローマの帝政、四三九——宗教統一の缺乏、四四〇——外國
宗教の横行、四四一——皇帝神權の思想、四四二——表面の統一、四四三
——ローマ法制の思想は亡びず、四四四。

ユダヤ人の宗教、四四五——ヤブエの一神思想、四四六——豫言者、四四
七——キリストの出現とその教旨、四四八——ローマの政治とキリスト教と
ギリシヤ哲學との調和、四四九。

西洋文明の根源三方面、四五〇。

二、中世の文明

.....四五二

中世紀の文明、四五二——キリスト教のロマ流入、四五三——キリスト教
のローマ人に與へし最初の印象、四五三——十度の迫害、四五五——ミラノ
の布告、四五六——帝國の國教、四五六——政教一致、四五七——帝國の
分裂、四五七——ゲルマン人、四五八——永遠の都ローマ府の陥落、四九九
——王國及諸侯、四六〇——政治の瓦解と宗教の統一、四六一——ローマ教
會、四六一——キリスト教會の協同一致、四六二——ローマ法王、四六二。
中世紀の區分、四六三——キリストの委任、四六三——教會の勢力、四六
四——シャルンマン大帝の統一、四六五——分業主義、四六六——封建時
代、四六六——教會の統一、四六八。

十字軍、四六九——東方交通の開始、四七一——政治統御の缺乏、四七二
——ダンテの「君王論」、四七三。

中世文明の内觀、四七四——教會宗義の整理、四七四——學院哲學、四七
五——實在論と名目論、四七五——保守的氣風、四七六——トマス、アキ

目次

目次

ナス、四七七。

教會の修道組織、四七七—ドミニコ教團、四七八—フランシス教團、四七九—教團相互の關係、四八〇—中世紀の美術、建築、ロマ風、ゴチック風、四八二—音樂、四八三。

中世文明の概観、四八四。

三、近世の文明……………四八六

精神と實力、四八六—近世文明、四八七—個人の實力と國家の實力、四八七—近世國家の起源、四八八—富の力、四八八—國家主義の意義、四八九。

思想方面の變遷、四九〇—名目論、四九〇—東羅馬帝國の滅亡と西歐諸國への影響、四九一—ルネッサンスの時代、四九二—レオナルド、四九四—人道主義、四九四—自然主義の勃興、四九四—理性主義、四九五—科學の發達、四九六—近世思想の傾向、四九六—現在主義、四九七。

新大陸の發見、四九八—列國の領地爭奪、五〇〇—自由思想と物質慾、

五〇一。

宗教革新、五〇二—滅罪の切符、五〇三—ルーテルの主張、五〇四—教會の分裂、五〇五—各國家の教會、五〇五—獨立主義、個人主義、五〇七—カルキン派の他力説、五〇九。

近世文明の二大特色、五〇九—經濟の點、五〇九—古代の經濟組織、五一〇—封建的經濟、五一—寺院と經濟上の發達、五一—自由市、五一三—ハンザ同盟、五一三—ギルド、五一四—近世國家の團結力、五一四—資本、五一五—パートナー組織、五一六—資本主の共同事業、五一六—工業革命、五一七—生産と交通との革命、五一八—資本と労働、五一九—分業組織、五一九—労働問題、五二〇—近世の自由競争、五二〇。

哲學の方面、五二一—理性主義、五二一—啓蒙運動、五二二—民約説、五二三—思想の爆發、フランス革命、五二四—フランスのルイ王朝、五二五—革命時代の美術、ロココ風、五二六—革命後の動搖、五二七。文學美術の方面、五二九—断片的美術、五三〇—音樂の方面、五三一。

目次

目次

西洋文明に對する吾人の覺悟、五三二。

外篇第三、三教會同觀察

……………五五

明治初年、五三七——祭政一致、五三七——政教一致、五三八——宗教の放棄と壓迫、五三九——復古と開國との關係、五三九——切支丹禁制の撤去、五四〇——外國思想の動搖、五四〇——宗教の疎外と信仰の低氣壓、五四一——刷新の必要、五四二。

三教の關係、五四二——宗教家懇談會、五四三——戰時宗教家會同、五四四——文科大學と世界の思潮、五四四——三教會同の意義、五四六——壓抑の排除と各宗教の自由發展、五四六。

國家と宗教との關係、五四八——政教分離の意味、五四九——日本の曖昧、五四九——明確な處置の必要、五五〇——國家の統治と人民の信仰、五五一——國家の生命と信仰の方、五五二——國家に對する宗教の本分、五五三——國家の宗教に對する態度、五五四——國家と宗教との精神的結合、五五六——日本思想界の粗漏、五五六——西洋での政教分離の由來、五五

七——政教關係の將來、五五八——日本の事態、五五九——結合と分業と自然淘汰、五六一。

宗教の感化と補習教育、五六三——教育の及ぼす社會、五六四——感化事業の聯絡統一、五六五——三教會同の實行的將來、五六七——三教會同の公式的方面、五六八——三教會同の實質的方面、五六八——宗教教育大會、五六九。

偏固の絶待本信論、五七一——人生本位の無視、五七二——信仰絶對論、五七二——教育本位論、五七三——國民道徳と人生の他の方面、五七四——根本と枝葉、五七五。

明治廿九年宗教家懇談會所見……………五七六

明治四十五年二月宗教家教育家懇親會寫眞

明治二十九年九月宗教家懇談會寫眞

目次

宗教と教育

(3)

一 一般の觀察

八開の智能を啓發し、徳器を成就して、その人格を完成するのが教育の目的。古今に通じて渙然らず、萬國に施して悖らない大道を信じ仰いで、人をして此の道に随つた生活を送らしめ、此の道を生命とした人格を養成するのが宗教の理想。此の教育と宗教とが互に相背き相容れない如く觀じ、又二者が相疎隔して、教育は偏に人を伶俐にするのみの道具となり、宗教は迷信や偏屈の安心に惰眠を貪らせるに至つたとすれば、人生の慘害、時代の不幸之に過ぎるはなからう。教育者は學校に立て籠もつて、その教授法の研究で人を飴細工に扱ひ、その教育の理論で社會人生を支配し得るものの如く心得、蟻が塔を積み上げた如くに、一寸でもそれに觸れる者があれば、直に出て來て

刺で刺す如き情状がありはしないか。宗教家なる者は、宗派の城壁に割據して、その黨與と共に偏見を養ひ、固陋の風を守り、愚夫愚婦の喜捨で僅な事業でも成し得ては、それで萬事を成し遂げた如く得々として居ないか。假令へ又それ程でなくとも、我が佛尊し、我が偶像のみが世を救ふ者の如くに考へて自分だけの信仰を作り上げては、それでなくば夜もあけず日も暮れぬと心得て居るのでないか。此の如き世に、教育と宗教とか相離反背馳して、各々その領分を争ひ、人心の歸着を失ひ、信念品性の陶冶を閑却するのは、自然の結果であるかも知れぬが、而かも自然として此のままに棄てておく譯には行かない。

二者の離
反の由來

抑も教育と宗教との離反は、西洋でも日本でも、由來する所は遠い。西洋では中世紀の間に、教會が萬事の上に權威を占有し、何事も傳承固定の教義で定まつた解釋を與へて、人心に餘裕の自由を與へなかつた結果、之に對する

日本の過
去

反抗が勃發して宗教改革となり、近世文明が新たな途を開くに至つた。而かも宗教改革後の新教も、尙ほ固定の信條に固着して權威を壟斷しやうとし、爲めに近世社會の必要に應ずる教育と衝突しつゝあり、その爲めに西洋諸國もこの衝突問題の解釋に苦心し、制度の上では處置を附けても、實質の方ではまだ完全の解決を得ないで居る。日本では、平安朝の古から、社會法制の根本たる儒教の現實主義と、信仰の力たる佛教の理想主義とは、十分の調和を得ずに相並んで居たが、鎌倉時代には日本的の調和を大分加へた。後に戰國の紛亂となり、徳川政府は亂離の跡を収める爲めに、一種の教育政策を取つて、士人上流の教育は徹頭徹尾儒教を中心とし、一般人民の感化は、全然之を佛教に委ねた。その結果、士風の陶冶には偉大な成功をなし得、それで政治の運用に鞏固な勢力を作り出したが、此れと共に國民の頭腦と心臓とは相分離し、又場合によりては随分相背反する様になつた。全くの背反でなくと

も、少くとも信仰を離れた道徳、宗教を除いた教育は、此の政策の力で深く士人の頭腦に浸潤し、維新まで平和鎖國の日本を支配して來た。明治の時代にも、此の士風の勢力は、官吏や教育社會を支配して、廢佛毀釋の運動に續いて、宗教排斥の氣風は、上流に横溢し、そこへ加へて、西洋近世文明の中でも、特にその不可知論、現實主義が、科學的教育と共に、知力ある方面の大勢力になつて、萬事啓蒙氣風で貫いて來、近頃になつては、經濟上の變遷や生活の事情が、益す現實主義を助長して來た。勿論、宗派分立の世の中に、又徳川時代以來實力と精神とを失つた佛教の行はれる社會に、學校教育に宗教分子を除いて來たのは、已むを得ない事で、又國家の統一精神を養ふ上では確かに賢明な策であつた。此の分離と、その主義から出た教育の結果については論ずべきともあるが、それは略して兎に角、此の分離は各々その分界を守るといふ意味以上に、二者の背反、教育者と宗教家との間に思想感情の疎隔を來したことも、亦事實争はれない。

此の如く日本の現在で宗教と教育との背反は、正當の分離以上に相疎隔して居、而してその原因は、日本自らに養ひ來つた三百年來の事情と、西洋文明四百年來の宿題とが、相からまつて居るのに加へて、又日本の國家的統一といふ他の大切な事實が之に加はつて、その過渡に處する困難が伴つて居るのである。それ故に此等諸方面の事情原因を觀察して、仔細に之を分析し、それ等の事情と現代の必要とを比較して見る事は、この問題の正當な解釋を遂げる所以であらう。然し又それと同時に、理論方面の研究を施して、教育と宗教との本性本分を考へ、その上で二者が離合如何に相交渉すべきかを定めるのは、即ちこの問題の根本的解釋をなす所以である。根本の觀察に入るに先つて、先づ現状とその由來とを考へるのは、此のためである。

先にも述べた平安朝の儒佛併立の結果、頭腦の事は頭腦だけとして、社會

生活の上で法制や道德などを、心情と併立せしめる状態を作り出した。當時の上流社會は、その教育に於ては漢學を主として、法制道德の思想はその方で養ひ、而して心情を言ひ表はす文學は、殆ど全然此と分離し、又信仰を養ふ宗教は、主として眞言事相の渴仰で之を充たし、理論としては如何なるものがあるにしても、事實實際には淺薄な兩部神道で此等を調和しやうとした。而してこの兩部神道も、教育や道德の力としては極めて微弱であつた。朝には大學寮で經書を講じ、法制を研究する人も、夕に家に歸つては、女のするといふ和文や和歌で感情を言ひ表はし、宗教としては現實の需要を充たすためにあらゆる佛菩薩を崇拜した。平安朝思想の代表者といふべき管公でも、政治や道德の上では純然たる儒生であるが、その信仰では敬虔で涙脆い觀音崇拜者であつて、此の二方面の調和は出來て居なかつた。此の様な腦と心臓との兩分、思想生活の兩方面が背反しないまでも、密接に交渉しないとは、此より以後、今日まで日本人には一種の遺傳になつて居る。

鎌倉の武家制度とその禪學修行とは、神儒佛三道の要素が日本風又は武士風で稍相合一した結果であつて、上流社會には大分此の混然たる思想生活が生じたしるしであるが、然し上流士分と一般人民との分界は、或は今までよりも多くなかつたかと思はれる。上流は、武士氣質の中に、思想と信仰とを統一し得たが、多數の人民は、やはり古來の幼稚な信仰と、兩部の迷信風とに生きて、道德思想や教育や修養の光明はそこまでは照らさなかつた。鎌倉の中頃以後、神道思想が、幾分か儒佛を合はせて、思想信仰の一勢力となつたのは頗る注意すべきことで、准后親房の如き代表者をも生じ、此の方面の統一勢力は、大分一般人民に及び得べきものであつたが、此れも順當に生育發達する前に輕薄な折衷神道に蔽はれる様になつた。足利時代の士人は、一部は禪の修養で精神を鍛鍊したが、下剋上の亂世には、法制道德教育の思想

は非常の衰頹に陥つて、禪も半は真言の事相的崇拜に侵され、社會組織の瓦解と思想の混亂とは共に相助長した。此の間には、教育や道德も、主義方針のあつたものでなく、偏に時と共に動くのみで、信仰も亦、禪、念佛、法華、キリシタンの混戰場となつた。

徳川時代の束縛

徳川氏が天下を定めて後に、政治上の統治と共に思想の統一を計り、特に士人の教育に着目したのは必迫の要事であつて、特にその教育思想の標準を、修身齊家の上で實行的に謹直穩健な朱子學に定めたのは、統治策としては儘に賢明の政策であつた。而して又士人の此の修養が、士氣の養成、大義名分の發揚に効を奏して、その學問の一部が維新の大業に參し、又維新後亂雜の間に處しても、新なる日本上流の思想に、國家的精神を失はしめない様にした功は、實に没すべからざるものである。元田東野先生の如きは、この勢力感化の最好代表者として、明治の教育に隠然たる巨鎮であつた。然し徳川氏

の政策は戰亂平定の後を承けて、萬事餘りに現状維持を主とし、朱子學派の着實な學風は保守に傾き、穩健は平凡と形式とに走る弊を現はし、その上その政治は堂々たる王道でなく、覇者の政治たる悲さには、一般人民を成るべく平穩に聲なき様にし、治者たる士人と被治者たる百姓町人との間には、あらゆる方面で劃然たる區別を立て、しまつた。又キリシタン禁制の必要上、宗門改めの制度で人民の信念に束縛を加へ、且つ寺録などの保護で僧侶を安心させ、信仰の方では壓迫の中に惰眠させてしまつた。その結果、大多數の國民は自分自らの修養でなしに祖先傳來の宗旨を奉ずるか、又は勝手に迷信に走る様になり、士人のみは鍛鍊修養の機關や機會を得たが、下民は盲目的に神佛の崇拜だけで満足する外ない様になり、義理と人情の背反ともなり、信仰と道德との扞格ともなつて、不幸な背馳疎隔に陥つた。一國では士流と下民、一家では男子と婦人、一人では頭腦と心情、義理と人情とが相分れ、疎隔し

て、その極は、權柄と放恣と、形式の保守と放埒の人情と、相衝突するに至つた。此の缺陷を充たす爲めに、心學や報徳の教も出たが、それも此の大問題に調和統一の解釋を與へるだけの力はなく、その間に明治維新となり、作り上げ、固め固めて來た霸道はその束縛の鎖を解いて國民を解放した。

明治の
開人の
心と
國の
解放

國交上の開國と人心の解放とは一つとなつて現はれ、庶民に至るまで各々その志を得しめよといふ大宣言は、明治の日本を支配する根本理想である。上流の教育をして來た學術は、全國民に及び、士分の武徳は、兵役と共に一般人民に普及して、新たな日本の教育は、永い冬の雪の中から梅が咲き、草が若芽を出す如くに、勃々の氣象を以て興つて來た。一國民として日本人の復活は、又實に精神上的の冬籠りを脱して、新文明の春風を自由に呼吸する様になつたが、この解放は、雪解けの水の如くに、人心思想の上に氾濫洪水の状態を呈して、浮動、突進、前後を顧みない様になつた。然し此の洪水もその過

新舊思想
の衝突

ぎ去つた後には沃土を殘して、一方では西洋の文明に對する眼が開いて來、個人的人格も認められ、立憲の政治にも進むと共に、又一方には國民思想の統一、國民教育の整理振興ともなつて、その結果、戰勝國民ともなり得、國運はあらゆる方面に開發して來た。然し思想の根本はまだ十分の解釋を得ず、國運の隆昌に伴ふ精神上的の問題は、尙も難關に彷徨して居る。此の難關といふのは、舊思想と新思想との背馳、理智と信仰との關係、實生活と理想との不調にあつて、此等が社會のあらゆる方面、あらゆる現象に現はれて居る。その一部として宗教と教育、宗教と道德、道德と教育、道德と文藝などいふ色々の間柄に不調和を來し、青年の懷疑煩悶となり、不平黨の勃發となり、理想主義と自然主義との衝突、保守道德と道德解放、徳川時代からの遺傳と明治の新思想との争ひなど、且暮に往來し、上下に横溢する難問紛々は、要するにこの同一難關の中で諸方面に生ずる紛擾亂態である。教育と宗教との

關係といふ一事を解釋するにも、その根本に着目しなければ、到底満足の解釋は得られない。此の根本といふのは、要するに信仰理想の人生に於ける位置如何といふ大問題であつて、この一問の中には、個人と國家・國家と人道、理智と信仰、此等の關係についての複雑の問題があり、此に加へて近世の社會組織、世界交通の自由、商工業の發達などいふ時代特別の現象も加はつて居る。此等の上を觀るには、又西洋の近世文明についての觀察をする要がある。

西洋の近世文明は、先に一寸述べた如く、中世紀の文明の定説固定に對する反抗で起つたもの、それに新大陸の發見、植民政策、商業交通の開發と工業革命とが加はり、民主主義の勃興となり、個人解放の要求となり、新な社會生活を作り出したが、その新舊衝突は、日本に於けると同じく未だ解釋を経ずに難關に彷徨して居る。宗教改革はローマ教會の教權を打破しやうとした

が、それに代へて興へ得たものは、やはり終にユダヤ的教權思想に外ならぬとになつた。文藝復興は旺盛な意氣込を以て、ギリシヤの自由精神を復活して、沈滞の空氣を一掃したが、その興へた人文主義は終に自然主義と相背馳し、その残した文藝は、終にクラシック主義の型になつて、ロマンテクの反抗を招くに到つた。自然主義の中からは、一方に科學思想を生み、科學の勃興となり、一時は科學の文明で何事も律し得ると思はしめたが、此の科學主義は十九世紀の半にその頂點に達して、今や科學者の中からも理想主義又は神秘的傾向を生じつゝあつて、その前途はまだ見込みは附かぬ。科學主義と相并んで出た自然主義の兒は、自由平等の社會的福音であつて、アメリカの獨立となり、フランスの大革命となつて、その結果、民主主義は世界の社會生活に一大潮流を作つて横流しつゝあるが、此の民主主義は、經濟上の工業革命と相合して、激烈な勞働問題、社會主義運動となつて、今方にその激流の中に

紛々の争端をついけつ、ある。そこに加はつて、此の渦動奔激の勢を増すものは、植民と商業の上での國際的競争、それに伴ふ軍備の擴張、租税の増加、生活の困難、尙ほその上に世界交通の自由は、物品の交換で現實の物慾に不斷の刺激を與へるのみでなく、あらゆる思想主張は、世界の一隅に起つては、忽に響の如く他の隅々に響き亘り、人心は彼れに向ひ、是に氣を奪はれ、落ち着きを得ない。

西洋の近世文明は即ち世界の文明で、東洋南洋何れの國も此の波動を受けないものはない。然るにこの文明は、未成品である、難關に彷徨して未だ出路を知らない問題文明である。そこに活き活きた生命があるには違ひないが、日本の如く、三百年の鎖國から俄に飛び出して、その渦中に投じたものには、一層の疑惑と面倒とを加へて、混亂の波に波を重ねて来る。現在の必要からして、日本は先づ近世文明で利用厚生の方面を取り入れやうとしたが、

物質の文明と精神的理想とは到底相離すとは出来ず、商工業に伴つた實利思想や社會主義の入つて来るのは勿論、科學思想と共に哲學や文藝上の新思想も入つて来て、この新國民の思想や感情に有力な位置を占める。此等の思想感情の奥には、又西洋古來の文明、ギリシヤ人の自由思想、有形美の理想も深く浸み込むで居、ロマの法制思想は、ユダヤの宗教信仰と相併んで、強く根を張つて居る。新日本の我々は、之を意識すると、しないとに拘はらず、此等現在の事態や當面の問題に對して解釋を加へなければならぬと共に、又西洋文明三千年來の問題にも接觸し、之を理會して、その解釋の少くとも一分を負擔して立つ覺悟がなくなれば、現在の問題に根本圓滿の解決を下すとは出来ない。現在に於ける教育と宗教との關係問題に對して、現實國家主義の道德があれば、宗教に用はないとか、科學の文明が發達すれば、理想だとか信仰だとかいふものは消滅すると云ふ如き、簡単な考へをする人は、實

に近世文明の性質を領解せず、日本の位置を知らず、又實に人生の活動が如何なる力で出来て居るかを知らない者である。

日本國民の遺傳性とも云ふべき頭腦と心臓との分離が調和の解釋を得ず、西洋の新文明がその四百年來の難問を一時に疊みかけて持ち込んで來たに於て、日本には又理想の國體を完全に仕上げて、新生命のある國家的統一を立て派になし遂げるべき、多望で又大切な天職が横はつて居る。これは全篇の決論になるべき點であるが、約して云へば、日本國家の眞正の統一は、天祖の靈徳を八紘に發揚して、二十世紀以後の世界文明に新光輝を與へて始めて完成することになる。その統一の中軸はどこまでも皇室の威徳にあるが、今までの日本歴史は實に此の世界的天職を完成する準備であつて、明治維新はこの大航海の船出であつた。日本の國家統一に重要な時期を劃したのは、神武の東征、崇神の四方教化、聖德太子の憲法、大化の新制、平安奠都にあり、

この統一の王道に陰翳を作つたのは保元平治の亂、源平の興敗、鎌倉の幕政、足利の亂世、徳川の封建などであつて、明治の維新は此の七百年の陰翳を除いて、神武聖帝以來の宏謨を恢弘するにあつたは、云ふまでもない。それ故に明治の變革は、王政の復古であると共に、實に國運の維新である。國體の恢弘擴張を理想とし、この恢弘といふことに、特別で又世界的意味のあるのを自覺しなければならぬ。單に國家の組織を完成して、一國の體面を維持し國運を昌にするといふだけならば、大した難事ではなく、現在でも大體はその目的を達して居るが、建國の大本を發揮し、萬世に亘つて渝らない大道を、國の徳として事實に體現し、皇祖皇宗の御威靈を六合に普く及ぼすといふ理想が根本に横つて居るから、茲に東洋四千年來の理想と西洋三千年の文明とに對して、批判し總合すべき大事業が吾々の肩に重荷となり、二十世紀以後の世界文明に對する大責任が生じて來る。維新の開國は、單に通商交通の爲

めの開港だけでなく、世界の大道に踏み出し、大に皇基を振起することに依つて、天地の公道をこの國家の生命に實現するにある。國家の統一といふ問題は即ち、此の天職を盡すための大統一であるから、我々は現實の國運隆昌といふだけでは満足するとは出來ず、又國運の昌であるに係はらず、社會、教育、思想、信仰、の問題が紛々として起つて來るのも、實は此の大事業のためには必然起るべき現象である。『龍大なれば風猛く、虎大なれば雨強し』の理で、事功が遠大であるにつれて、難問が紛糾するのは自然の結果、敢て驚くには及ばぬ。然し驚きはしないで、眞面目に此の際に處し、深く問題の根柢を探つて、人生の奥、人心の源泉にその解決の鍵を探り求めなければならぬ。

現在の混
沌状態

日本の現状が、變遷混沌の有様にあるのは寧ろ至當のことである。過去の歴史に現はれて來た國民性、又其の中に現はれて來た國家の理想が、社會の

組織、民心の歸向と密着して居るから、一方には其の特長を維持しなければならぬ。然るに開國の國是が定まると共に、國家の發展を廣く世界的文明の舞臺に開展し、遂には東西兩洋の文明思想理想に對して、世界に類例の少い統一を成し遂げねばならぬ。この保守と進取との複雑な關係が、獨り有形の社會的事物に現はれるばかりでなく、道德、宗教の理想や實際問題にも現はれ、恰も彼の小兒が成長する際の成長熱と同じ現象を呈して居るのである。それ故に法制經濟の問題は云ふまでもなく、この混雜は、教育、文藝、信仰、思想等、あらゆる方面に亘つて、深い根を有つて居る。各々の個人は一々この複雑な渦動の中に在つても、その依て來る處、又指して行くべき目途を意識しないが、何れの人の心にも、その底にはこの有力な二つの潮流が渦巻いて居る。例へば、家族制度に結び付いた祖先崇拜の精神は、單に形の上ばかりでなく、何となしに人の感情に蟠つて居る。而かも祖先崇拜の意味は十分

道德問題

に明白でなく、祖先の靈が果して存在するや否やと云ふ疑問が、新教育を受けた脳髓には自から湧いて来る。或は又親に孝行を盡すと云ふ心は、人情の自然であつて、何れの人もこれを失はないにしても、古來傳へて來た廿四孝風の考へは大抵の人の腦髓には消滅し、其の上、前時代の思想を固守して居る兩親の考へと、新時代の教育を受け、現代の社會に處する必要の爲めに生じて來た新な考へと、この二つが相容れない爲めに、孝行を盡す上に於ても煩悶疑惑が生ずる。又國家の臣民としての立場に就て云つても、今までの社會では、人が各々自分の位置を守り、自分の仕事に忠實であるだけで濟んで來たが、現代では、何れの人も多少國政に參與して、政治の一部分に携はる爲めに考へ且つ働かねばならぬ。而かも政治の目的としては、直接の國運隆昌と云ふ事の他に、尙高い意味が有るやに思はれても、それが明白に現はれず、政治の理想として一代を支配する有力な思想は明白に現はれて居ない。

或は又轉じて藝術の方を見ても、今までの繪畫彫刻は、餘りに型が極まり過ぎて、これ以上發展の餘地があるや否や疑問であるが、而も西洋の美術はまだく多數の魂に入つて居ない。音樂にしても、日本風に歌詞の附いて居る音曲でなければ、意味が分らないが、今までの歌は現代の生きた感情を歌つたものでないから、腑に落ちない。而かも西洋十九世紀風の純音樂を味ふには、感情が淺過ぎる。文學にしもて同様であつて、新文學は大分起つて來たが、それは現代社會の一部分にある苦惱煩悶を現はしたゞけで、人間に希望と光明とを與へる位置には進まず、且又古代文學の型は、尙多數の人心を束縛して居るから、この新文學も社會一般には及ばない。其の他科學は、今までの日本に存在せず、全く新しい方面であるから、この様な煩悶はないが、哲學や倫理思想になれば、印度支那を経て養ひ來つた理想主義の思想と、西洋現代の實驗主義の思想との間に、まだく距離が遠く、思想家は兩方に足

を入れて、時としては、其の兩足が相離れんとして足元ががたつく。このやうな不調和或は衝突は、日常生活の些事にも澤山現はれて居るが、(例へば靴を履いても、靴の泥を拭ふ習慣が付いて居ない爲めに、室内に泥を持ち入る如き、又は外國人と交際して挨拶するに、手を握て置いて尙一度頭を下げる如き)、其等は總べて社會の状態、一國の文明全體を支配する潮流の渦動に外ならぬ。先きに一國の統一と云ふ事を云つたのは、單に政治上の國家統一だけでなしに、社會生活、思想感情の上でも、東西兩洋の異分子を集めて、調和のある統一、約して云へば、この國家の存在に依つて、文明の統一を遂げやうと云ふ大問題が、總べての根本になつて居るのである。

教育と宗教との關係と云ふ問題も、矢張りこの大潮流の一部分に現はれた問題であつて、日本でも古來十分に統一が出来て居なかつた精神生活の兩面、並に西洋の近世文明でも、今方に難關に遭遇して居る現實と理想との交

渉から生ずる困難が、此處に一つになつて來たのである。この難問は、日本現在の大問題であるのみならず、人類全體に亘つた未解決の難問である。即ち教育が直接に目的とする所は、現在の生活に處して有益な資格を作るにある。然るに人間の精神は、現實だけでは満足せず、何かの理想を要求する。而して教育は、その德育で此等の理想を、どれだけかは與へるが、而かも理想は水平線の如く、一步先きに進めば、一步先きが現はれて來る。この限りない理想の要求を、何かの方法で満足させようとするのは、宗教である。然るに宗教の理想は、往々にして現實を離れて、先きに進み過ぎる。其處で現實世界を主とする教育と衝突する憂ひが甚だ多い。これは極めて概括して云つた事であるがこの衝突が或は個人の要求と社會生活との衝突にもなり、國家の存在と人道の理想との衝突にもなり、又は思想の上での實驗主義と理想主義との衝突にもなる。衝突する憂ひがあるからと云つて、人間の生活に此

等の諸方面がある以上は、其の一のみを採つて、其の他を全然壓抑する事は出来ない。現實生活の爲めの教育が、如何に宗教的信仰を排斥しても、宗教の要求を制限し、又多少の代用を與へる事は出来やうが、全然壓抑し、消滅させる事は出来ない。總べての方面で、實驗主義は必要であるが、理想主義の光りを遮れば、人心は暗中摸索の状態に陥る。さすれば人心の此等の二方面は、衝突するものとして、一方のみに偏する事は出来ず、教育と宗教とは、何かの點で相關係し、又契合せざるを得ない。衝突は事實であるが、それは果して根本的の背反であらうか。又はその大本から考へて、何か調和の方法、統一の根據はないか。この問題が現在の日本に取ては、色々の由來事情相集まつて、差し迫つた問題となつて居る。吾々は如何にしてこの二つを調攝し得るか、これから其の解釋を試みやう。

二 個人と社會

氷雪の長い冬も去つて、春風が吹き初め、霜柱の解ける時になれば、今までは何處にあつたか分からない種から、新な芽を萌き出す。二葉の若芽を見れば、何れが何の草とも見分けもつかないが、それが段々春の光に生長して、大きくなるに従つて、各々異つた草となり、葉の形も違へば、紅紫様々の花を開く。然るに夏の盛りに繁り茂つた草も、秋風にあへば、霜に萎れて枯れ草となり、元の土に歸へれば、何れが何れとも分からぬ様になる。然しそれで植物の生命が盡きたのでなく、冬過ぎて又の春に逢へば、又新な植物が生へる。年々歳々草木の生命は、斯くの如く循環して、百千萬年變る事が無い。年々見慣れてゐる爲めに、この不思議に對して、何とも思はずに過ぎる

が、考へて見れば、此處にも天然世界の不思議な謎がある。然しこの謎は、天然世界に限られた事ではなく、人間の生活も亦同様の不思議ではないか。人の幼時には、何れも無邪氣な子供として、食ふと眠るとの外、仕事もなく特色もない人間であるが、段々に我意を主張するやうになり、成長しては賢愚利鈍色々の特色を呈する。それが又老衰しては、食氣ばかりの老人となり、遂に同じく死の戸口に入つて行く。この一生の生活には、野の草木と同じやうな経過があり、人間として同じ性質を共通に備へると共に、又人々各々其の特性に於て狂ぐべからざるものがある。この同一の性質即ち平等相と、特質、即ち差別相との間には、如何なる聯關があるか。其の上に、人は個人としての生活の外に、社會に生活し、個人的特色に於て換へ難きものがあると共に、又如何なる個人でも、其の棲息する社會の歴史、傳承、周圍事情の影響を受けずには存在し得ない。此處に又人生の差別相と平等相との不思議な關係がある。

斯くの如く人間の生活には、個人の方面と社會の方面とがあり、個人の生活は各自の要求を貫き、各々自らの特色を發揮するにある。これに反して、社會的方面では、衆と共に生活し、歴史境遇を共にし、思想感情を交換し、利害に於て離合集散する生活である。而して、社會は個人以上の生命を有し、如何なる特色のある個人をも、社會と云ふ組織の中に入れて、出来るだけ統一のある生活をしやうとする。この二方面は全然調和すべきものであるか、或は又相背くべきものであるか。

この二方面の關係が、古來個人の精神に色々の苦痛を與へ、又社會に種々の難問を與へた事は、今更云ふまでもない。徳川時代に義理と人情との衝突が、一代の煩悶になつたのも、要するに、社會の傳承的規律である道徳と、個人の要求との衝突とに外ならぬ。又所謂る現代思想の特色とも云ふべき、

個人解放の要求は、社會の因習に對する新なる個人性の反抗である。この混雜は、日本の社會にも及んで、所謂舊思想と新思想との衝突となり、一方に家族主義を保存して社會の鞏固を計らうとする人があれば、他方には之に反して、個人本位の自由主義が烈しく反抗をする。社會の爲めに生存し、國家の爲めに働け、個人は畢竟國家の手足に過ぎないと教へても、(高等小學三年用の修身教科書の如きは、全然この主義に出來て居る。)個人の自發作用はこれを抑へることは出來ず、新な文明の刺戟が、有らゆる方面に加はるに従つて、個人は各々特色を發揮せざるを得ない。又従つて其の要求を貫徹しなければ止まない。恰も春雨の後に、勃々として成長する草木を、人力で抑へても、抑へ切れないと同じく、春の荷は床を通して、寢て居る孩兒を突き通すと云ふにも似た勢ひで成長し、人各々の要求は鬱々として發生する。此く見て來れば、人生個人と社會とは徹頭徹尾衝突すべきものであるか。平等と

差別とは、遂に相容れないか。

この二方面が相容れないものとするれば、社會生活が個人を殺して了つて木偶を並べたやうな社會を作るか、然らずんば、社會の壓迫を全然取り去つて無政府主義の理想とする如き個人のみの生活を本位とするか、二つに一つを採らなければならぬ。極端な國家主義論者は、國家の權威を盾として前の解釋を採らうとし、無政府主義者は、個人の自由を主張して、後の解釋を採らうとする。日本の現在には、國家主義の勢力が多いから、個人主義の極端は現はれて來ないやうであるが、國家主義即ち社會生活本位の壓迫が強くなれば、なるに従つて、個人主義の反撥は、遂に爆發せざるを得ない。これは遠い將來の事ではなく、現在に於ける自然主義の潮流に、一つの逃路を求めて、又極端な過激行動に噴火口を求めやうとして居る。此くの如きは、社會と個人との關係に對する覺悟が完全でなく、平等と差別とに付ての見解が徹底し

て居ない爲めである。此等の覺悟觀念が徹底すれば、この二方面は、遂に一層高い見地から調和し、統一せらるべきである。

* * * * *

この二方面の關係を觀察するに必要な第一の點は、繼續性と革新性との關係である、手近い方から見て、草木の生命一つにしても、この二方面を備へて始めて全きを得る。近頃東京市中で松や樅などの常緑樹が、煤烟の爲めに續々枯れるが、これ等の樹木は年毎に葉を新にする草木と違つて、革新性が強く著しくないから、生命が弱つて來る爲めである。これに反して、草花は如何なる陋巷塵埃の中にも、平氣で繁茂するのは、其の生命が春毎に新になる爲めである。然しながら、このやうな草は、どうしても老松となり得ない。それは繼續性が弱い爲めである。然しながら、松樅にも革新性は備つて居て、葉に新陳代謝もあれば、又種から新たな樹を發生する。繼續性の弱い野の草と

繼續性と革新性

身體の繼續と革新

云へども、年毎に枯れはしても、春になれば又同じ種類の生命を續ける。

一人の生活にしても、能く働く者は能く眠り、朝毎に新鮮なる活氣を回復する。睡眠は個人生活の革新性の代表であるが、一夜眠つて居る間に、前日の事を忘れる程になれば、繼續性は無くなつて、其の人の生命は一貫したものでなく、日毎々々の斷片的な生活となる。これを身體の上から見ても、骨格は繼續性を代表し、血液は革新性の原動力である。骨のみで人間は出來ず、血液のみで生活は維持出來ない。人體の生活は、食餌營養で新分子を取り入れ、時々刻々新生命を生み、それと同時に發汗糞尿で不斷の葬式を営みつゝある。この新陳代謝の中軸となつて、生命を繼續して居るのは、骨格體質である。

個人と社會との關係に對して此等の事實は、單に類例でなく、根本に於て同一の親縁ある事實である。社會の生活は繼續性を發揮しなければ、維持す

社會生活の革新

る事が出来ず、個人の生命は革新の力を表はさなければ、其の意味を失ふ。社會の傳承習慣は永續し、個人の生死以上に亘つて勢力を揮ふが、この繼續性が餘り固くなれば、何事も固定して、動きのつかないやうになり、頑冥保守の氣風のみが社會を支配して、生々の活氣は無くなる。其處で新たな個人が生じて、新たな眼を開き、新たな心を以て社會の中に生活し、固陋の氣風を破り、保守に對して、進取の氣象を發揮する。

昔、或る僧侶があつて、無闇に病氣を恐れるので、或人がそれに對して、坊主が命を惜しがるのは、甚だ似合はしくないと忠告した。其の僧侶の云ふには、自分の命は惜しくないが、折角積み上げたこの學識が、この身と共に亡びるのが惜しいと答へた。この僧侶の云ひ分は一應尤もに聞こえる。學問でも技術でも、段々に積み上げて、何時までも死なない人がこれを完成すれば、世の中の學問はどれだけ進むかと云ふやうに思はれる。一人が折角學識

を積み上げ、技術を練つても、其の人が死ねば、其れ限りになつて、新たな個人はいろはから始める。大學者の子供でも、父親の學識を其儘に相續する事は出来ず、必ず初歩から始める。代々世々このやうな事を繰り返すのは、不經濟極まつた話である。然しながら、試みに思へ、二千年前のアリストテレスが、死なずに今日まで生きて居たとすれば、非常な物識りになつて居るかも知れないが、其の人の脳髓で、常に新たな方面を開拓し、新たな発見を爲し得たとは考へられぬ。或は又、雪舟が足利時代から今日まで生き残つて居たらば、其の人の技術は非常に進んで居たかも知れないが、同じ人が浮世繪を開拓し、圓山派を創始すると云ふ事は、到底想像出来ない。新しい個人が新たな脳髓で新たな方面を開拓しなければ、文明は決して豊富にならない。それと同じく、社會の制度、文物、理想、活動も、革新なしに唯繼續するのみなれば、エジプトのミイラの如く、保存はされても活氣は無い。支那人の保守的

思想、印度人の階級制度の如きは、革新性の乏しい繼續であるから、四千年來固定して、一國の文明は型の如く動かない。但し支那や印度でも、代々いくらかの革新はして來たから、今日まで生き残つては居るが、繼續性の勝ち過ぎた爲めに、活氣は麻痺し、意氣は銷沈して了つた。(今度の支那革命の如きは、極端な繼續性に對する過激な革新性の發揚である。)

一個人の精神生活にしても亦同様であつて、老人は過去の事を記憶する力のみになつて、新な物事を、新な眼孔で見る活氣が無くなつて居る。其處で老人の特色として、保守一面に偏する。これに反して、兒童や青年は、日々接する事々物々が新であり、これを見る眼が新であるから、何事に對してもあれは何、これは何故と云ふ疑問を發する。十五六の青年が、何んでもない事に無闇に笑ふのは、其の知識理性が成長しつゝある爲めである。革新的生命成長の止つたものには、疑ひもなければ笑ひもない。子供は胡蝶の如く、

老人と青年

春の花の間を飛び廻るが、老人は岩石の如く、風に吹かれても、霜に晒されても、つくねんと立つて居る。社會にして革新性を失へば、老人になるのは自然の勢である。

其の反對に、革新の力はあつても、繼續性が弱くなつた個人は、恰も記憶を失ひ、思想を混亂した狂人の如く、忽に悲み忽にして笑ひ、止まる所なく、守る所なく、生命の意味を失つて了ふ。人の性質でも、輕卒浮薄と云ふのは、即ち狂氣の隣りであつて、繼續性のない代表である。即ち記憶や理性が現在の判斷に對して勢力を失つたことに當る。可笑しな例であるが、婦人の貞操と云ふ事は、一人の男に忠實なる事であつて、其の反對は、娼妓の如く、且に吳夫を送り、夕に越郎を迎へると云ふやうに、守る所の無くなつたにある。人間一生にしても、青年の生意氣は此の方面の特性であつて、一人の思想にしても、性格にしても、唯時に従つて動き、事情に應じて轉ずるのは、革新性

繼續性の
缺乏と狂氣

はあるやうでも、繼續性を失つたのであるから、革新の新なるものが、前後の連絡を失ひ、従つて意味を失つてしまふ。社會も同様であつて、例へば大革命以後のフランスの如き、國體政體を破壊し、道德をも宗教をも革め、今まで神を祭つて居つた殿堂で、裸體の女優を祭り、年號も月の名も改め、それで社會を一新したつもりであつたが、それが爲めに、紛々擾々停止する所が無くなつて了つた。四百年來尊王心の篤いので名高かつたフランス人でも、一朝その繼續性を失つては（その原因は又色々あつて、王朝貴族の壓迫が堪へ切れないために爆發したのではあるが）、國民全體が此の様に狂氣になつて、その狂亂が鎮まるのは容易の事ではなく、革命後百二十年の今日でも、尙やはり繼續性を重んじないで、輕動する傾きがある。（勿論此と同時にフランス國民には他の長處はあるが）。此の様に、繼續性を失つたのでなしに、繼續すべき貴重の遺傳のない人民は、一方には進取の氣象に富むが、又浮薄突飛

の弊を免れない。アメリカの如きはその適例であつて、その國民的短所も長所も此にある。一家にしても、俄分限の成り上りには、此の性質が忌まはしい現象を呈するのは、人の能く知る事であつて、所謂 *Dispirit* は、又實に飛び上がり、跳ね廻はりの氣象である。畫では *Recession* 哲學では實用主義 *Pragmatism* 文學では自然主義、皆或る點では此の性質を具へて居る。

斯く見て來れば、植物の生命でも、人間の生活でも、又社會の生命でも、苟も生きて居る者は、何れも皆革新性と繼續性との調和で生きて居るのであつて、その一方が退き、一方が増長すれば必ず不調の破綻を生ずる。而して此の兩面は一見しては反對の勢力の様であるが、又その一方が偏したのを相對照して見れば、反對の事實であるが、而かも實際は、二つが別々に働いて居るのでなく、二者の調攝案配が即ち生命なのである。健全の状態といふのは、即ち此の二方面が圓滿に働く状態であつて、人間では中年の生活がそれで

あり、子供は革新性の方に、老人は繼續性の方に傾いて生きて居る。それ故に社會發達の或る時期、或る状態では、小兒の状态、進取革新の勢力が秀でる要があり、又或る状態では、其他に傾かざるを得ない様になるが、圓滿な状態は二者の調和にある。それ故に革新性の秀でるのは、此の圓滿の状態に進む豫備としてのみ必要があり、意味があるのであり、老年の状态は、やがて來るべき革新の先驅であつて、人間で云へば、老人の老衰すると共に、他に子孫が新に成長しつゝあり、社會で云へば固陋沈滞の極は、終に革命を起して來る。革命は即ち生命を新にする所以で、此がなくば死滅に陥るが、然し社會として云へば、爆發的に革命をせずに、始終革新性と繼續性との攝調を圓滑にして進むのが、即ちいつまでも健全の國、イギリスの如き是れである。又は革命といへば恐ろしいものと思ふが、革命その物は悪いのでなく、革命を必要とし、革命を爆發させる様になる状態が、悪いのであるから、革新の生命さへ、よく繼續性と調和して進めば、革命の要はなくなる。

そこで個人の生命は、社會に對して云へば、革新性を代表し、社會は個人に對しては繼續性を代表するようになる。個人の精神は、常に四圍の状态に應じて、新しい眼を開き、新しい要求を提出する。特に現代の如き刺激の多い社會には、春日の光に、草木が鬱生すると同じ様に、新方面の思想と慾望とは、抑へやうとしても抑へ得るものでなく、その勢力は、即ち個人の自由を主張し、要求を貫く力となり、所謂個人主義の潮流となる。之に反して、社會には傳來の勢力があり、又之を保存して、後昏にも傳へる必要があるが、社會的勢力は、どこまでも保存の方面に動く。社會は勿論新しい方面にも向ふが、それはその生存を續けて、古來の傳承を維持するためには、已むを得ないで出て來ることである。例へば日本で現在非常な國粹保存の國家主張者でも、西洋風の商工業を入れるには決して反對せず、如何なる保守家の間

供する如きは、その最も著しい事である。又法律制度は何れも、全體のために個人を自由をどれだけか制限しないものはなく、此がなければ社會は成り立たない。然るに、個人の生活には各々その要求があり、特に近世社會の如く、社會の組織が複雑であれば、人々の境遇利害に差別は多くなり、文物の刺激が多くなれば、人々の趣味や慾望も益々多様になり、又猛烈になるから、どうしても個人の要求は強く又弘くなる。色々の關係が複雑になれば、生存競争は國際にも個人間にも激しくなるから、社會はその間に處して力を纏めて行く統一の必要が増し、又文明の制度や機關を利用して、統一を迅速完全にすることが出来る様になり、個人は又各々その境遇に應じて、此も亦文明の利器に依つて個人の要求を主張する。個人主義は、先に述べた如く、革新の原動力として大切な事であり、個人主義を立てるには、人々各々その個性を發揮して、獨立を完うする必要が多くなる。そこで近世文明の特色として、

社會の統一性と個人の獨立性との對立が著しく、又その衝突が烈しくなる。而して此の二つの間柄は、又所謂階級戰爭の姿でも現はれて、資本家と労働者といふ様に、階級同志がその獨立性を發揮して、利害相争ひ、同じ階級の中では、又個人の獨立要求も強くなる。即ち統一性と獨立性との争ひは、單に國家と個人といふ簡單な形でなく、色々複雑な形を取つて現はれる。

此く見て來て、統一性と獨立性とはどこまでも衝突すべきものであるか。また近世社會での此の争ひは、終局的のもので、他に解決の方法はないであらうか。近世文明の問題は實にこゝにあることで、勿論その解決は決して容易の業でないが、而かも根本に於て、獨立性と統一性とは、徹頭徹尾相容れないものでないのみならず、實に同一生命の兩方面として缺くべからざるもの、二者相助け相補ふべきものである。又近世文明の社會には、此の二つの破綻は、激しく現はれ來たが、文明がどこまでも又いつまでも、此の形を取

る外ないといふ譯でなく、新状態に適應すべき過渡の現象、變遷の苦痛に外ならぬ。新状態とは、主として世界交通の發達と機械工業の勃興とに伴つた、社會生活の變遷であつて、そのために國家の生活状態も變じ、個人思想も變じて、今益す新状態に進まうとする成長熱の發して居る状態を云ふ。而して此の状態は、いつまでも社會と個人と二方面の衝突で續く者でなく、社會の組織は個人の獨立を容れて行き(即ち民主的社會の發達)、而かも全體の統一を鞏固にしようとし(即ち國家主義の充實)、而して個人の方でも、其の觀念理想を此の社會に適應しようとする(即ち社會に於ける人格といふ觀念)方向に向ひつゝある。十九世紀の文明は、フランス革命と工業革命との後を承けて、二方面の衝突のみが進んで來た様であるが、二十世紀は今や將にその調和の方面に一縷の光明を望む方に進んで來た。現代道德の煩悶を訴へて居るメーテルリンクすら、神秘的理性 *Raison mystique* に人心の融合を望み、反

抗主義のキリスト新教の中からも、來るべきは公教主義 *Catholicism* であることを見る人の出て來た如き、僅に曙光に過ぎないが、來るべき光明が如何なる種類なるかを示して居る。即ち個性を發揮して而かも之を統一するといふ理想、又統一の中に複雑の個性を養成して、統一の内容を豊富にしようといふ方面である。

統一と個性との本來の關係は、生物の身體によく表はれて居る。先に革新性と繼續性との説明に、小兒、成年、老衰の身體に就いて述べたが、それと同様に、統一と個性との調和は、生物の身體にも現はれて居る。即ち身體は、一個の有機體として一つ全體をなして居る。然しその全體といふのは、同質の成分のみで出來て居るのでなく、骨皮臟腑、色々の機關で出來上り、その機關の組織や血液は、皆細胞の生活で出來、此等種々の異分子が相集まつて有機的統一をなして居る。そこでその組織を組み立てる一々の細胞には、皆

特色のある生活があり、赤白血球の如きは、血液の中に浮遊して、それだけで獨立して單細胞動物の如き生活をして居る。而して此等の細胞や血球がその個性を發揮するのは、決して全體の統一を害しないのみならず、身體全體の生活力は、實に細胞生活の總合であり、その個性が強くなれば全體の生活力も盛になる。身體が全體に強ければ、營養が好くなり、血液の循環が旺んになり、細胞や血球の力は増す。血球の生活力は、其の獨立的活氣の増すと共に、血液の中に入つて來るバチルスを殺す爲めに發熱の現象を呈し、皮膚に侵入して來るバチルスを包圍攻撃して、化膿の現象を呈する。メチニコフの此事に關する發見は、生物學上又醫學上大切な事であるのみならず、生命の統一と其の成分との關係に付いて、適切な實例を與へたものである。

社會の統一と個人の獨立との關係は、生物の身體で、全體の機關や、細胞の特性活動との關係と同じであつて、社會の統一の力が強ければ、その中に出

る個人の獨立も盛になつて、而かもそれが全體の生活力を高める。社會の統一には種々の勢力があつて、個人を束縛する。その勢力は一國歴史の傳承、道德義理の觀念、法律制度の強制、郷黨や家族の連鎖、風俗習慣の保存、禮儀作法の制裁など、皆この勢力であつて、今日教育社會の呼び聲になつて居る神社崇拜や祖先崇拜も、その統一保守の必要から出た提議であり、世の中の穩健な思想といふのは、多くはこの方面を重んじたものである。然るに、近世社會の生活は、個人の活動が特に必要になり、一方に法制があれば、之を行ふ人には個人として責任が重く、一方に經濟組織が大きくなれば、之を運用する會社重役の如きは、特にその人格に重きを置かなければならず、一般の生活から云つても、責任ある位置に居る人は、人格の力が大切で、即ち個人としての能力も必要なれば、責任も加はつて來る。そのみならず人類社會の生活は此等の社會的活動、組織的事業のみでなく、精神的理想的活動の方

でも加はらなければ社會にも眞の活氣は生じない。而して精神理想の事は、制度や組織で出来るものでなく、實に個人の特別の精神活動、即ち弘い意味での天才の創始力に待たなければ出来ない。

社會の組織は岩山の如きもので、個人の精神は、その間に流れる水脈に似、而して天才はその水が一つの泉となつて滾々盡きないに似て居る。岩山がなれば、水は散じてしまつて、泉にはならないが、岩のみでは泉は迸り出ない。今茲に天才といふのは、弘く見ての事で、學術や藝術の上でも、又は思想や信仰の事でも、何か從來の文物に新方面を開拓し、新産物を寄與する人の謂である。天才がどうして出来るかといふ如き問題は、茲に觸れる要はなく、只天才の獨創力が如何に社會生活の進歩にも（天才を天才として別に見る方面は措いて）必要であるかといふ點を觀察する必要がある。

* * * * *

近世文明の一特質は科學の力にあるが、科學の進歩は決して社會の制度で出来るものでなく、又研究者が在來の結果を定説として守つてのみ居る様では、出来ないことは殆ど明白である。近世物理學の開祖ともいふべきニュートンの重力説は、林檎の落ちるのを見て、今までの人が不思議とも何とも思はなかつたのを、不思議として思案し始めたから起り、ダーキンとワレーヌとの進化論は、マルサスの人口論から惹き起された人口問題に關係する疑問に對して、新たな眼光で動植物を見始めたから生じて來た。バストユルやメチコニフの病理研究でも、キユリの放射作用研究でも、皆個人の腦に起つた特別な疑問が、今までの科學説を覆す元になつて居る。要するに科學の進歩が、個人の社會的協同性から出るよりも、大部分はその個性、獨立の研究心から出ることは、疑ふ餘地はない。藝術の方面になつては、個人の天才的獨創力に待たなければ、眞の發達が出来ないことは、殆ど自明の事で、今一々之を

述べる要はなく、而して藝術は、直接に利用厚生之道ではないが、之が社會生活の光明となり甘露となるのは、頑迷家の外疑ふ者はあるまい。

道德の理想や宗教の信仰は、一方には保守的傾向があつて、社會の統一的勢力になるが、而かもその活氣ある新發動は、いつの世にも、個人の天才に待たなければならぬ。一代の理想が固まつて、一世を支配する様になれば、道德は制度法制と同じ様に、社會の統制力になるが、それが此の如き確定の勢力となつた時は、その源泉の力が衰へ始めた時であつて、即ち道德が形式で人を支配する始め。宗教も亦同じく、その信仰が一世の人心に行き亘り、教會の信仰宗義として勢力を振ふ様になれば、その力は遠く及ぶが、發生の活氣は續かないで、終には固定した信條教條の末のみを重んずる様になる。それ故に道德や宗教が社會に弘く行はれる様にするには、統一性の方面を重んずる必要はあるが、その活力を新又新にして、内容を豊富にし、新勢力を

發揮するには、個人の獨創に待つ外ない。孔子は支那の社會的道德を整へた人で、或る方から云へば保守の人であるが、而かも在來の道德の中から、天命の信仰、仁と信との理想を發揮して、此に新生命を與へた個人的天才である。それ故に、夫子はその當時には志を得なかつたが、百世の師となつた。此の點から云へば、孔子も一の豫言者である。その他宗教上の豫言者、祖宗といはれる人々は、皆此の種類の先覺であつて、人の愛に先つて憂へ、人の先に立つて光明を得た人である。(世界諸宗教の先覺者について、その精神的覺醒が、如何に一代に先んじ、又後世の教導になつたかは、次章の終りに少し述べる。)

此は獨り道德や宗教だけでなく、大抵の事業には、皆事業の先驅、開拓者があつて、その人の個人的精神が社會の輿衆に先つて覺醒し、新方面に進んだために、その人は當時の世界には知られず、又は迫害を受けた例は甚だ多

い。徳川時代は最も獨創の少い時代で、社會の統一力が個人を壓迫した世であるが、その間にも、トンネルを開鑿した人や、空中飛行機の發明に苦心した人はあつたが、皆殺されたり、苦境に沈んで表はれずに終つた。兎に角社會の統一平和は、制度文物の保守で出来るが、その活氣ある進歩は、個人の力、その個性の活動に待つ。この個性の活動が激烈で反抗的破壊的に表はれることも、歴史上には例は多く、ルソウの思想の如きは、終に革命を生み出したが、キリストの信仰の如きも、或る點では在來の宗教に對する反抗である。但しキリストは自ら、法律を破るために出て來たのではなく、法律を成就するため、*bring* するために出て來たと云つて居るが、然しその所謂成就するといふのは、在來の統一をそのまゝ平和に維持するの謂でなく、それよりも高く清いものを新に開顯するといふ義である。この覺悟は何れの個人の活動にも必要のことであるが、場合によつては此の様な意味での革新刷新をも容さ

ない様な社會があつて、全く個人の活動を抑へ、平和秩序のみを重んじ、保守のみに偏する時代がある。徳川時代で、御芽出度いといふことゝ、相變はらずといふことゝ同一の意味になり、御芽出度いといふのは、又平凡、凡庸、愚劣、即ち社會に盲従するのみで、自覺のないといふ意味になつた如きは、僅なことゝに時代の精神を示して居る。此の如き社會では、その統一を維持する力に眞の生命はなくなつても、個人の心を衷心から動かすことが出来ない様になつても、尙も形式のみの惰力で人を支配する様になる。そこでその極、個人精神の鬱屈は終に爆發せざるを得ない様になる。徳川幕政の轉覆、王政の維新は、直接には個人主義の勃發ではなかつたが、その遠因の一部分は、源義公や關齋など思想家の頭腦から出て來、身分の卑い浪人や下士の働きて動き、而してその結果は王政の下に、庶民に至るまで各々その志を得しむべしといふ新思想になつて現はれた。

此の如く見て來れば、社會の繼續性並に統一性と、個人の革新性並に獨立性とは、互に一つ全體の二方面であつて、それが圓滿に行はれては、相背くべきものでなく、二方面が相容れず、衝突せざるを得ない様になるのは、社會にとつても個人にとつても、不本意不幸の至りである。即ち輪廓的に云へば、社會は其の組織を鞏固にし、而かも其の中の個人をして、各々其の處を得しめ、個人は自らの個性を發揮しつゝ、自分の人格を社會の一員としても作り上げ、此の如くにして、社會の統一と個人の獨立とが、相悖らない様にするにある。人間の身體では、全體の組織と細胞血球の獨立活動とが、圓滿の關係を保つて居るが、社會の組織は、人體の如く完全でなく、個人の獨立は細胞よりも自由であるから、其間に不調和の起る事は多い。然しそれにして、人生の理想がこの調和にあるは、明白の事であらう。且又二つの調和が破れて、一

方のみが勢を占めるやうになつても、兩方の特性が互に相正し、相制する力があつて、足利の亂世の後には、徳川の治世が次ぎ、中世紀の固まつた文明に對しては文藝復興の春風が吹く。然し若しこの兩分子を適宜に配合して行けば、此くの如く相反抗せず、同時に調和して、圓滿の社會生活をなし得る事は、イギリスの社會に實例がある。

個人と社會とこの二つの結合關係は、實際問題としては、何れの國にも、常に難關に遭遇するが、其の解釋の要件は、要するに、人情の自然と至誠の心とを教へに依て普及し、個人をして自己人格の自覺の中に、社會共同の力を味はしめ、社會は又和樂溫愛の團結として、個人の自由を許すにある。個人が各々其の能を盡すのは、一方には人格の發揮であると共に、社會に對する報恩の仕事となる。社會が個人の服従を求めるとは、賢明なる權威に依らなければならぬ。この關係は尙ほ慈愛と權威の章で説明する。

今個人と社會との關係を、二つの方面から觀察して來たが、これを又教育と宗教との間柄に就いて觀察するに、教育は、其の直接の目的とする處、社會の生活に適する人物を陶冶するにあり、宗教は内心の信仰に依つて、人々をして各々自らの基く處、自分の生命精神の本源に、連絡交通せしむるにある。其故に、分けて云へば、教育は人生の社會的方面を目的にし、宗教は個人を理想とする。社會と個人とが、何處までも相背くものならば、教育と宗教とは相容れない事になるが、今まで述べた如く、正當の意味、圓滿の關係では、相寄り相補ふべきものである以上、教育と宗教とも、亦元來、相和し相助くべき筈のものである。即ち教育の目的は、社會國家の爲めに有用の人物を養成し、共同生活を遂げるに必要な品性を開發せしむるにあるが、其の爲めに、智能を啓發し、徳器を成就せしむる場合に、個人の性格を基とし

なければ、智育も其の効を奏せず、個人の獨立性、個人の良心を、自發的に完成せしむる様に導いて、初めて教育の目的を達する。個性を重んじない教育は、人間を機械にするに均しく、一定の定説を奉じてこれに盲従し、固定の道德觀念を規則法律の如くに遵守する人物を作り得るに過ぎない。教育が個性を重んずると云ふ事は、教育者の方でも承知して居る筈であるが、教育の目的とする處を早く達しやうとする爲めに、人を鑄型に當て符め、定説規律を押し付ける様にする傾きは、現在の教育に往々現はれる弊害である。此くの如きは、一方には社會現在の急務に應ずる爲めの便宜と、教育者自身に、個性の發達自覺の力が缺けて居る爲めでもあり、又それと同時に教育の本義に付いて、底の底まで考へないで、社會と個人との關係に付いて偏見がある爲めである。例へば、今日の女子教育では、所謂の賢妻良母主義が、殆ど自明の公理であるかの如く思はれて居るが、これには西洋風の女子教育に對する反

動もあり、又穩健な教育を施せば、學校管理上平和を維持し、何れの方面にも非難のない教育を施し得る爲めである。然しながら、賢妻良妻主義も、其の弊に至ては形式に陥り、嫁入した後に姑に事へる稽古に、按摩の稽古をさせるると云ふやうな滑稽を演ずる。此くの如きは極端の例であるが、又其の反對に學校教育は總べての女子をノラと育て上るべきではないことは明白である。然し兎に角、現在の教育は、個性を重んじない爲めに、趣味の開発、或は獨立の判斷力が著しく缺けるやうになつて居る。

兎に角教育の目的とする處は、社會の人を作るにあるが、其の人物養成にどうしても個人の人格を重じなければならぬ。而して人格の完成は判斷の獨立、又は自制の力を養ふにあり、其等の力は根底に入れば、個人が自分の心の底に、遍通の生命、不滅の光明を發見するにある。この状態は、即ち信仰の安立と稱すべき者で、それが直に現在の何れかの宗教で生ずるには限らないが、

人格の完
成

○宗教と個
人の信仰

何かの宗教的信念に至らなければならぬ事は、事實の證明する處である。他方宗教の目的とする處は、此くの如き根本の自覺にあるから、一見しては極めて個人的の信仰である。人が何と云はうとも、自らの信する處を信じ、境遇が如何に變つても、自ら安んずる處を換えない。この自覺信念の状態は、外から與へられるものでなく、心からの確信、心底の覺悟に基くものであるから、其の方面だけを云へば、どうしても個人的獨立性を備へて居る。宗教信者である生徒が、教師の言葉を容易に容れないと云ふ非難が、教育者の間にもあるが、自己一個の信仰の爲めに、他人の精神を領解し得ないのは、勿論信仰の偏固を示すものである。然し此くの如き生徒は、一旦これを領得し得心すれば、強固な知識を得、力のある實行を遂げ得ると云ふ方面のあるを忘れてはならぬ。兎に角、宗教の信仰は確に個人的である。然しながらこの個性の發揚は、其の本性孤立的でなく、自分の生命を自分一個だけの一時の生

命とせず、命の親、天地の大道、神佛の恩徳と結び付け、心と心とを相通する状態に入るのであるから、宗教の信仰が圓滿に發達すれば、其の個人的自信は即ち同時に、萬有を友とし、人類を兄弟とする心になる。又この心を適宜に導けば、即ち社會的の方面に其の力を發揮して、國の爲めに一身を賭し、義の爲めに一命を棄てる人にもなる。これは勿論極めて圓滿な宗教心について云ふ事であるが、其處に至らないで、個人性を主張する弊があるからと云つて、宗教心を排斥するのは、個人性の何たるを解せず、又個性と社會團結との關係を無視するものである。

個人性と社會性との關係に基いて、教育と宗教との間柄を見れば、兩方共、其の極端が、短所缺點に於て相反對するが、本來の精神天職に於ては、同一の根を有つて居る。教育が社會性の方面で現實を重んずる爲めに、宗教の信仰を容れ得ないのは、教育家自身に信念が缺乏し、個人性の發達して居ない爲

めでないか。一にも訓令、二にも指令、教育者の行動のみならず、思想までも、自家自發の發動を制限し壓迫するやうな状態では、教育者の個性は發達せず、獨立の思想も確信ある行動をも爲し得ないのは、自然の結果である。師範學校から出て、教育に従事する一生の間、此のやうな窮屈な空氣の中に棲息すれば、如何なる人も、習ひ性となつて、個性を失ふのは當然の事である。獨立心のない教育家が、宗教の信仰を毛嫌ひするのは、無理ではないが、其の爲めに迷惑を蒙るのは生徒である。さうして其の結果は、確な人物を作り得ないか、若しくは又獨立心ある人物は、學校から放逐せられると云ふ結果にもなつて、結局一國教育上の大損害である。

これと同じく、宗教家は、往々にして、人は信仰さへあればいゝ、さうして其の信仰は自己一家の満足さへあれば好いと云ふやうな方向に走り易い。信仰と云ふ事を、極めて偏狹に見、科學研究の味をも嘗めずに、宗教は科學以

上だと澄まし込み、理性に合はないでも、信仰は獨立に全いものだと考へる者も少くない。キリスト新教の、只信せよと云ふ教、或は眞宗の一向専修の如きは、殊にこの弊がある。此くの如きは、所謂る信仰の力があるやうでも、其の基礎になつて居る思想に、堅牢な世界觀と雄大な抱負とを缺いて居る爲めである。徳川三百年の間、熱烈な信仰の發揚を許されず、何等の社會的活動に加はらず、學問と云へば、古典註釋の字句に止つて居た上に、明治の新天地にも、繼子扱ひに社會の片隅に押し込められた宗教に、此くの如き性質の固着して居るのも、當然である。然しながら、總べての宗教が此くの如きものでなく、又過去には、宗教の眞精神が、宏大な社會的活動に發表した實例に見、又近年世界各國ともに、宗教的合同の廣濶な理想運動が現はれ、又社會救濟の宗教的活動が、十九世紀の後半以後著しく發達して來たのを見れば、宗教信仰のこの復興的精神が、日本にも活躍して來るやうにしなければならぬ。

左すれば、宗教は段々教育の補助となり、國民の教化にも必要な原動力となるに違ひない。

三 國家と人道

觀察點

文明

國家についても人道についても、種々の見方があり、又時代の觀念に應じて様々の解釋を容れ得る。法理の上から見た國家と、歴史の方からいふ國家とは、全然同一でなく、學術の方からの人道と、宗教又は道德の方面で見るとは、必しも一致しない。此處にはそれ等を一々吟味し、又歴史に照らして論證するのではなく、宗教と教育との關係を觀察する立場からして、人生文明の舞臺として、國家と人道とを論ずるのである。

文明といふ事にも、亦種々の見方はあるにしても、要するに、人間が天然や周圍の事情に對して、單に受動的の位置に立たず、天然を征服し、事情成行を制御して、何かの理想目的を立て、進む活動全體を指して文明といふ。

それ故、文明の中には、所謂物質文明の分子もあれば、法制や經濟の事も勿論加はるが、その中心には人類の精神的自覺があつて、その力で理想に進むなり、又事情を案配するなり、總ての物事に精神的意味（慾望、思想、判定、理想等）のある様にするのが、即ち文明であつて、國家も人道も、此の文明開發の舞臺、文明的活動の領域である。

國家の成立は如何にして出來、又それを組み立てる人間には如何なる種類があるにしても、どれだけの統一と歴史のない國家はなく、而してこの團結の力は、又色々の方面に發展すべきであるが、その進路に何か理想の光明がない國家は、正當に國家といふだけの價のないもの。國家を以て權力關係で出來た團結とするのは、その發生について一方の見方であるにしても、國家に一定の主權があり、その團結の中心がある以上は、一方には民福を愛護育成する方面と、他方には、内部の不正を制する司法と、外部の不義を征服

國家の成立と成分

する兵權とがなくては、國家は成り立たない。而して此等内外恩威の行動が行はれるには、又人種や言語、風習や道德などで、その人民にどれだけの統一がなければならぬ。此の團結統一の力は、前に述べた社會の統一性に基くことであつて、此の統一は國家の歴史にその根據を据え、繼續性と保守とをその力とする。

然るに何物でも生命のあるものには、保存と共に進取の力がある。鞏固と共に開發の能力がなければならぬ。國家の進取開發は、勿論利益の擴張と云ふ事にあるが、但しこの利益と云ふ中に、精神的方面のあるを忘れてはならぬ。國家の團結を鞏固にする勢力は、單に國土血族など、有形の方面だけでなく、文明即ち精神的勢力によつて成り立つて居るのであるから、其の利益を擴張すると云ふ事にも、其の文明、其の理想を開發し擴充する精神的原動力がなければ、國家の生命は薄弱のものになる。國家が文明の爲めの團結で

ある以上、其の進運が又文明の理想を目的とすべきは殆ど自明の事である。國家を以て、單に團結を維持し、生存を保存するだけの團結と見る如きは、國家の意義を薄弱ならしむるものである。凡そ物進まざれば則ち退く。生物の生命は新陳代謝で新しい方面を開發しなければ老衰する。國家も其の通りであつて、其の團結を鞏固にするのは、生存の第一要件であるが、保存のみあつて進取がなければ、國家の生命は、單に外に向つて發揚しないばかりでなく、其の内部の生命も亦衰へて了う。これ等の事實は、何れの國の歴史にも明白な事で、今更其の實例を列擧するには及ぶまい。

國家が其の生存を成し來つた歴史は、即ち又將來の進取に對する方針を與へるべき力である。今までに造り上げた國土の經營、文物制度の整頓、此等は又國民の思想、道德、文藝、美術など、文明の精神的内容を養ふ源であるが、此等の文物には、年來養ひ來つた國民の精神が籠もり、國々に各々其の特

質がある。この特質は、他國民の特質と相並んで、各々の國家が、其の財寶として尊重すべきものである。尊重すべきものであると云つて、唯これを保存するに止まるならば、親から譲り受けた財産を、其の儘に保存してこれを活用しないと同一事である。勿論活用するには、新方面の發展を要し、今まで意識しなかつた方に進む必要もあるから、多少の危険を含むに相違ない。然し危険を含むと云つて、じつとして居るのは、惰眠に陥る因であつて、保守の空氣は、即ち精神的安逸の状態を生み、安逸靜止は遂に事情の變化に適應する力を失はしめ、其の極は精神的自滅の結果に終る。形はあつても、精神的に死んだものは、遂には形の上でも滅亡すべき運命を持つて居る。其故に一家の財産にしても、親譲りを其儘に保存すると云ふが如きは、徳川時代のやうな靜穩固定の社會には通用しても、變遷の多い明治時代には滅亡の原因となる。それと同じく、國家も、鎖國の状態では、保守主義で續き得るが、

世界の舞臺に立つた以上、進取の活潑な氣象を開發すべきは、當然の事である。この意氣を缺いた爲めに、印度は亡國となり、支那やトルコは、其の滅亡の淵から脱れる爲めに、動亂の中にある。

文明の力

凡そ進取の氣風と云ふのは、商工業や植民の政策にあるばかりでなく、進んで自國の文明を世界に示し、自家の理想に依て他國民と共に文明の徳に浴する氣風である。單に他國を征服するばかりでなく、又自分の尊い理想を以て他國民を教化すると云ふ意氣込がなくてはならぬ。國家が其の獨立の生存を保つのは、單に生きる爲めでなく、自國に特有な文物理想を維持する爲めであり、これを維持すると同時に、其の感化を他に及ぼす覺悟と抱負とがなくてはならぬ。即ち國家は文明の爲めの團結 *civilised power* であると共に文明を進める力 *civilising power* である。

自國の文明を以て他を教化する *civilising power* は、自國の理想に對する

確信がなければならぬが、其の確信は、徒らに自家を主張し、自ら尊び自ら誇るのみであつてはならぬ。如何なる生物でも、身體が丈夫であると云つて、それを頼みにして、食物を取らずに居る事は出来ない。國家も亦、文明の爲めの團結として、自分の理想を開発するには、自ら頼む所あると共に、他の文明理想をも領解し同情し、或は又これを取り入れて消化する雅量がなければならぬ。開國進取の氣象と云ふのは、即ち此の事であり、維新の御誓文に、知識を世界に求め、大に皇基を振起すべしとあるのも、即ち此の點であつて、開國と云ふ事は、單に通商の爲めの開國でなく、雄大な精神を以て、他國の文明に觸れ、世界文明の舞臺に交つて、國家の天職を發揮する所以である。このやうな意味での開國は、自らの特色を棄て、迎合するものでなく、他國の文明に對して、胸襟を開くと共に、又自家の重寶を他國民にも示し、若くは與へるべきである。

近頃保守論者の中には、日本國家の特色は、日本のみの特有であつて、他國の習ふ事の出来ないもの、従て又日本は、道德の點に於て、他國から學ぶべきものがないと云ふ人が多い。此くの如き精神的鎖國論者は、人間精神の微妙なる働きを知らず、又文明交通の何たるを思はないものである。日本は道德に於て萬邦に卓絶して居て、他に學ぶべき事は一毫もないと假定しても、文明理想の上に於て、交通が出来ないと云ふ筈はない。例へば、世界一の大學者があつて、其の人は他人から學ぶべき事は少しもないと假定せよ。其の人が自分の知識を自分で楽しむだけで満足し、自分の知識を整頓して、他人に示し、又はそれを以て他人を教育しやうともしない場合には、其の人の知識は、延びくと成長するであらうか。教育者の常に經驗する所であるが、自分の知識を整へて、これを人に傳へると云ふ事は、單に他人を教育するだけの事ではなく、又自ら氣の付かなかつた點に注意し、或は考へなかつた方面を

發見する源となる事が多い。教育するのは、單に被教育者の利益でなしに、又教育者自らの利益である。或は又宗教の信者で、絶對の安心を得、信仰に於ては奥底に達した人があると假定せよ。其の人が、自分の信仰は絶對である、他人から學ぶべき事がないとして、山林に隱遁して、自ら信仰を楽しんで居れば、それで信仰の眞意義を得たものと云ひ得やうか。勿論、信仰は内心の事で、言葉を以て人に傳へ得るものではないが、此くの如く孤立して、自分の信仰を楽しむのは、佛教で所謂獨覺のやり方であつて、其の信仰は偏頗な畸形的信仰である。信仰の熱烈な人ならば、必ず自らの信仰を人にも傳へたいと云ふ熱情を起すに違ひなく、而して此くの如き傳道の活動をするに依て、其の人の信仰が、一層熱烈になると共に、其の精神が一層廣濶になる事は、古來傳道者の事歴に徴して明白の事である。傳道の熱誠は、信仰から出るが、信仰が傳道に依て、廣く大きく且つ強くなるのは、要するに、人間精神の交通性から來る事である。

人間の精神は、元來孤立的に成り立たず、交通に依て其の内容を豊富にする。人格の力は、先きに述べた如く、獨立の個性を發揮するにあるが、而かも人格の完成は、交感融通に依つて出來上る。それと同じく、國家の獨立、一國民固有の文明は、其の獨立性を確にし、しつかり其の源を養ふ必要のあるは、勿論の事であるが、其の獨立は、又開國進取の活動に依て、廣く深い意味を得て來る。古來人間の歴史を觀るに、國民の交通、思想文物の交換は、實に意外に廣く行はれたものであつて、交通の不便や、言語の差別など云ふ障礙を打ち越える力がある。人類學者の格言に、人民の交通は、商業に先つて、お伽噺に初まると云ふ事があるが、これは事實であつて、人間の思想が種々の交通と共に、波の如く世界に廣がる案配は、謂はゞ精神の波が、世界上に及ぶとでも云ひたい位である。東西兩洋の交通は、アレキサンデル大王

の遠征に依つて、大に開發したが、其以前からして、思想の交通は物品の交換と共に居つたらしい。又支那と印度との交通の如きも、漢の武帝の遠征が大切な時期を劃して居るが、其の前からして、佛教の宣教師は、支那の邊境まで来て、其の信仰は微かな夢想の如く、支那人の脳髓に響き渡つて居た。又徳川時代の鎖國時代にも、長崎と云ふ小さな窓から入つて來る空氣が、科學思想を傳へては、水戸の學問所へも入り、宗教を傳へては平田篤胤の脳髓にも波動を及ぼして居た。國民の交際には、商業と兵力關係とが表面に現はれた大切な力であるが、思想信仰は、其の裏に隠れて隠然人心を支配しつゝある大勢力である。古代交通の不便な時にすら、此の如き精神上の往來があつたのであるもの、今の世界に、商工業だけでは交際しても、精神の方面では取り入れもしなければ、與へもしないと云ふが如きは、畢竟癡人の夢である。非常な壓迫禁制の下にも、幕府大奥の評議は、其の日に筆寫新

開紙で江戸中に傳はり、ロシアの如き壓迫の下にも、トルストイの著作は、寫本で全國に傳はり、出版も翻譯も、忽ちにして世界に廣まる。大隈伯の談話は、次の日の夕刊新聞でロンドンの人もこれを知り、メーテルリングの新作は、忽ちに印度や日本でも讀まれる。此くの如き思想の交通は、無線電信の波動の如く、世界の人心に縦横無盡に波及しつゝある。此の間に處して、何れの國民も、其の精神的生命を維持し、發達するには、自ら守る處を失つてならぬは勿論であるが、而かも心を開いて他國の思想理想と交通し、單に他から理想を貰ふだけでなしに、又自分の理想を他に與へる覺悟がなくてはならぬ。この覺悟と其の實力のないものは、世界の精神的舞臺に孤立して、遂に滅亡すべき國民である。國家が文明の爲めの團結であつて、而して文明は各國民各々特色はあるにしても、共に俱に世界人道の舞臺に立つて働くべきである。國家と人道との關係は、此くの如く、先きに云つた個人と社會と

の關係に同じである。此の理を見ないで、國家を狹隘な國家主義で固め、精神的鎖國を行ふのは、文明團結として、又文明の教導者としての國家の天職を放棄するに當る。國家は、此の如くにして自分の特色を維持し得ると思ふのは、大間違ひであつて、精神的孤立は、やがて意氣の銷沈、氣風の沈滞となつて、國家の文明をも、道德の特色をも殺し去る所以である。

此等の點を能く考へて來れば、教育と宗教との關係についても、正當の解釋を下すことが出来る。通常世間の教育者で、この二者が相容れない如く考へて居る人の常套語として、宗教は世界主義で立ち、教育は國家主義に基くから、二者は相衝突するといふ。成るほど、世界主義といふのを、漠然たる人道といふ點から見、國家主義を特色維持といふ方面のみから見、その上に抽象的に宗教は世界主義、教育は國家主義だと定めて、無理に障壁を作るな

國家の立
場と教育
並に宗教

らば、二者の相容れないことは明白である。然し此れは、實に論據要請の甚しいものであつて、先づ二者を各々その相容れない方面に解釋し、その意味のみで定義に定めておいて、而してその決論で二者は衝突すると論證するものに外ならぬ。井戸の水を汲むに、一つのつるべは上り、他は下るのは事實である。そこで、上と下とは反對であるとし、上るものと下るものとは相容れない、反對だとし、而して後に一方のつるべの上るは、他のつるべの下るに害ありと決論する者があつたらどうか。今の世の教育宗教衝突論者には、往々にして此の様な議論がある。勿論、論より證據、宗教の或る點が明かに今日の教育に反對する點あるのは事實である。又教育と宗教とが、その本分目的に於て、相異なる處のあるも事實である。又世界主義と國家主義とが、或る點で、又は或る人々の頭腦で、相容れず、衝突しつゝあるのも事實である。然し二者がどこまでも、如何なる意味でも、又如何なる解釋でも、

衝突するといふのは、明白に過論である。

教育の目的は、直接には國家を本位とし、國家のために人を作り上げるにある。そのために第一に必須とする所は、國家の臣民、社會の一員として、國民たる資格を智徳兩方面で育てなければならぬ。一般に教育が科學を授けるにしても、只管科學的眞理のために科學を授けるのではなく、國民生活上に効果を呈する様に、智能を啓發するにある。徳性を陶冶するに、漠然と人の人たる所以の道といふ様なことになしに、國民としての品性資格、社會家族の中に生活するための道徳を本とするは至當のこと。この意味で一般の教育は、國民教育であり、徳育の基本は、即ち國民道徳にある。此の點に於て、教育者が自家の本分を覺悟し、その使命を自覺し、又自家の事功の上に確信を持つ事は、教育の効果を擧げる所以であつて、何人も之を犯してはならぬ。この目的のために、教育は國家の歴史を重んじ、國民の特性に特に注意して、その繼續性と統一とを鞏固にする努力をしなければならぬは、是れ亦明白の事である。然し、國家教育は、在來出來上つたものを守るだけの教育でなしに、國家の進歩のために、土臺を作らなければならぬ。即ち單に過去のついでとして、現代のための人間を作るだけでなしに、過去の歴史を尊重すると共に、それに基づいた將來の進運に有力な人物を作るといふことも、亦教育の肝要事項である。文明を保存するための國、civilised powerとしてだけの國、そのための國家教育ならば、偏に現實主義の教育でよからうが、先に述べた如く、文明の國は、又他の文明と協同し、他を文明に導く civilising power であるべきであるから、その意味での國家主義には、自ら別種の方面が表はれ、又そのための國家教育には、どうしても、過去を保存し、又は今日のためといふだけでなく、又將來の國民を作るといふにも、一層深く遠い目的と意味とが生じて来る。

教育は、直接に國家の爲めに人間を作り上げるのを目的とするから、先づ第一に、國家の利益と云ふ事を目當てとし、又個人の爲めにも、現實の世に處して行く利用厚生之道を與へなければならぬ。所謂る智能を啓發すると云ふのも、直接の方面から云へば、利益を増進すると云ふ事に歸する。それから進んでは國家としての存在を守る爲めに、其の人民が自分の利益を犠牲に供しても、國家自衛の爲めに働くといふ徳を養成しなければならぬ。義勇公に奉ずるの心が、即ちこれである。この方面は、教育の直接に目的とする處であるが、世の教育者には、往々にしてこの直接實利の方面のみを見て、利用厚生や、美勇奉公の、一般人生に於ける意義、又廣く人道に對する關係を闕却する人が往々にしてある。其の反對に、人道博愛の主義を唱へる宗教家、或は理想家には、この直接の必要を棄て、一足飛びに、廣く人道主義を唱へる人がある。此くの如き兩極端は、共に智能と徳器との眞意義を思はず、

又國家と人道との關係を誤つたものである。利用厚生之道と云ふのも、個人の生命を維持して、其の幸福を増す爲めであるが、而かも個人の生命は、國家の一員としてばかりでなく、廣く天地人生の中に棲息する生命である。故に、利用厚生之道を講じて、其の根本を忘れては、輕薄な現實主義に陥つてしまふ。

吾々の生命は、云ふまでもなく、孤立して維持し得るものでなく、家族と共に、又社會の中に、又古今の世界文明の中に棲息して居るのである。(此等の點は、尙委しく慈愛と權威との章に譲る)。其故に、利用厚生之道を辿つて、其の奥に入れば、遂に自分の生活が、弘い人道、世界の人文の中に棲息して居る消息を悟り、寛濶包容の心持ちを以て、自分の生命を圓滿にし、豊富にする事が出来る。この心を以て世に處して行けば、生存競争と云ふ事も、自ら意味を換へて、人生の大調和の中に棲息すると云ふ自覺に進む。手近い話が、

自分が今着て居るシャツや洋服は、自分の勞働した報酬に依て購ひ得たもので、これも生存競争に勝ち得た賜物である。斯く觀るのも一面の眞理には違ひないが、然しそれと同時に、一層廣い考へを持てば、この着物の毛は、オウストラリヤの野に育つた羊から取つて、これをロンドンに運び、ランカッシャで織つて、日本に持つて來て、洋服屋が縫ふてくれたのである。これも事實相違ない。而してこれ等の生々繁殖や、交通運輸、工業勞働などは、皆人類の長い間かゝつて發達し得た文明の賜物で、即ち人道の大調和に依て與へられたものである。實利主義の教育は、利用厚生の極めて偏した一面のみを與へるに過ぎない。

愛國心

國家自衛の爲めの徳に至ても、これと同様に、國家本位と人道本位との兩面がある。國家を本位として云へば、勿論、國家の獨立を維持し、他國を排斥して、其の繁榮を計る必要がある。この目的の爲めには、國家は、其

の人民をして、己れを棄て、國の爲めに盡さしむる必要がある。愛國心の養成は、直接にはこの目的の爲めであつて、愛國心が敵愾心ともなるのは、必然の勢である。然しながら、若し教育が、この直接の必要のみを目當てとして、現實主義の愛國心を養成すれば、其の極は、無益なる悲憤慷慨の思想を養成し、排外思想になり、ジソゴウやシヨヰニズムとなつて、國家をして極めて狹隘な意味の團結たらしめる恐れがあり、又此の様な狹い考への國家は、その發達を延び々と發展し得ない様になる。

今日の教育に、所謂尙武の氣象を養ふ爲めに、誤てジソゴウを養成しつゝある傾きはないか。愛國心と排外思想との間に、區別をし得ないやうな弊は存在しないか。

兎に角、國家主義を現實の方面に限れば、人道と相背くやうになるが、國家本來の天職は、此くの如く狹隘なものではなく、又國家の爲めの教育、愛國

愛國心と人情

心の養成は、此の如く表面の意味に限られるべきものでない。愛國心には、人情の自然に基いた點があり、又人道の一部分となるべき意味も備つて居る。即ち愛國心の根本は、愛郷心に基き、父母の國、幼時の天然に愛着する心が元になり、それから進んで、自分の精神に、言語、風習、道德、觀念など、人文の要素を與へてくれた自國の文明を愛する心にもなる。己れは、生をこの國に享く、吾れ此の國を愛せざらんやと云ふ心は、即ちこの國土と國民同胞の共同生活と、其國の歴史文明、即ち約して云へば、己れ自らの生命を與へてくれる國家に對する愛情である。即ちこの方面から、人情の自然な發露として、愛國心を見れば、それは父母を慕ひ、其の恩德を思ふ孝の心、又兄弟姉妹に親しみ、心を共にし利害を共にする悌の心、又朋友と相信じ心を打ち明けて交る友情、これ等と愛國心とは、一と續きの人情、相離るべからざる徳である。

人情の自然と云ふ側に對して、愛國心は又人情を制する側がある。即ち仁に對する義、慈愛に對する權威の方面である。人は生きて居る以上、何人も其の生命を愛する。然るに國家は、國家の立場からして、個人が其の利害をも生命をも犠牲に供する事を要求する。納税の義務、兵役の義務などはこれから生ずる。個人と國家とのこの方面での關係は、或る法理學者から云へば、權力關係であり(穗積博士の説)、或は進化論から云へば、矢張り利益の必要から生じた便宜方法であらう。(加藤博士の説)。然しながら、これは一面に偏した觀察であつて、國の爲めに汗水や血を流すのは、人が自分の生命を、自分以上の理想の爲めに、犠牲に供する美德から出て居る。この徳を行ふのは一面苦痛なやうであるが、又他方には己れの生命を棄て、一個人以上に力がある永遠の生命に托する喜びがある。昔から、君の爲め、國の爲め、或は信仰の爲めに命を棄てた人は、皆喜んで死に就いて居るが、此も矢張り人情

至美の發露である。

人は己れの生命を孤立と感ずるほど、寂寞な事はない。必ず他と生命を共にし、自分の生命は、五尺の身體 五十年の生命に過ぎず、霜露の日影を待つやうな生命であつても、それが一層高く廣い生命の一部分であると自覺する上に、人生の確かな意味を發見して來る。此くの如き覺悟と安心のある人ならば、大生命の爲めに、己れの小生命を棄てる事は、衷心の喜びとなる。愛國者、殉教者の安心は、此處に据わつて居る。この方面から云へば、愛國心には、人情の奥から出て來た、自己犠牲の精神が現はれて居て、決して權力の壓迫で止むを得ずにする事でもなく、又利害便利の爲めに、假りに發する心でもない。愛國心が廣く人道と連絡し、其の根底に至ては一つであるのは、一にこの自己犠牲の徳たるが故である。この意味から云へば、愛國心は人道の一面であつて、この關係を自覺して盡す愛國心は、又同時に人道の爲

自己犠牲
と生命の
共通

めに盡す精神となる。古の諺に、忠臣は孝子の門から出づとある如く、人道の勇士は、愛國の魂が生み出す産物である。

* * * * *

斯く云つて來れば、必ず疑を挿んで難する人があらう。其の様に愛國心を觀察するのは、畢竟人道といふ目的を最上において、國家をその方便に使ふものであるから、國家主義の教育は、此の如き見方を許さないと。然し、此は目的といひ、方便といふのを、機械的に見るためであつて、先にも述べた如く、國家の文明を維持し發達するための團體として、世界に孤立し得ない點から云へば、どうしても人道を目的にして進まなければならぬが、而かも人道に進むといふのは、自國の特色を没却して、漠然と人道に合併するのでなく、世界を文明にする勢力としては、各々自家の特色を以て世に立ち、人道の内容を豊富にしなければならぬ。それ故、人道といふのも、總て國家の

目的と手
段

特色がなくなつて、全世界一様の文明になる事ではなく、各々の文明がその特色と獨立とを維持しつゝ、互に相調和し、又互に相教導して進むにある。社會の生活が目的であるから、個人の人格は衰へても無くなつてもよいといふことの出来ないと同じく、假に人道が目的だといふ云ひ方を許しても、それで方便たる國家が亡びてもよいといふことには、少しもならない。個人は、家族のために、又は國のために、己を犠牲に供するにも、必しも己れを無くする要はなく、假令へそのために身は亡くなつても、その精神が生きて、百世に感化を與へることは、仁人義士の事例に明白である。それ故、又國と共に人道のために盡すといふ覺悟も、決して直に己れを無くし、國を輕んじなければ出来ないことではなく、自己の信仰を貫き、人格を發展して行く上には、國家を通じて人道に貢献する事もあらうし、又人道のために盡すことに依つて國家を正路に導き、國家の文明を豊富雄大にすることもある。目的といひ方

便といつて、一つが立てば他は棄てられ、狡兎射られて走狗煮らるといふ如き考へを持つのは、實に氣宇の狭小から出る事で、此の様な狭量から打ち立てた國家主義は、即ち國家を鎖國的退嬰に陥れて、亡國にする所以である。

此に於て一つ、國民的宗教と世界的宗教の別と並にその關係を考へて見なければならぬ。何れの社會でも、その團結發生の始めには、血族種族の關係が、社會團結の基礎になつて居るが、その状態では宗教といふ事は、血族團結のあらゆる構成分、即ち同祖の信仰、その祭祀崇拜、又社會の統治制度や風習行事など、皆宗教として行はれる。此の様な種族的宗教の状態では、宗教が團結の力になつて居るといつても、又は種族團結が宗教を作り出して居るといつても、同じ事であつて、その中の個人は生まれて種族の人となると共に、又その宗教の信者であり、種族團結を離れて個人の存在のないは勿

論、一般社會の信仰行事以外に、個人思ひ／＼の思想といふものはない。自分所屬の社會が教へるまゝに信じ、輿衆が動くまゝに自分も動き、信仰も道徳も、同祖同一信仰の社會團結の外には存在しない。此の様な種族的宗教の狀態は、今日も尙地方の村落や、又は都會でも自覺のない人の集まつた家族の間には存在して、人がかう云つた、他がかうしたといふ事が、自分の思想や行動の標準になつて居るものは少くない。

種族的宗教では、社會團結の事實と宗教の信仰との間に、何等の杆格もない代りに、又その範圍では、個人の自覺は生じ得ず、眞理とか道とかいふ觀念は存しない。然るに種々の種族が相接觸して、その間に近親の關係、又は勢力關係などで、幾多の團結が出来て來れば、社會は單に血族關係や風習行事で團結せず、種族間の正義を代表する君主の下に統一する様になり、而して君主は一方には、最も有力な種族の族長であると共に、又種族の關係を結

ぶ正義又は法の代表者となり、族長として司祭の事を行ふ外に、兵權と司法權とを掌握する。支那で百姓を統御し、印度では諸の Janak 羅馬では Gens を多く結合したのは、即ちこの王權であつて、日本の神代でも皇室は、八十氏人、諸の氏族の上を總括せられ、その間に行はれる正義の監督者である。百姓を牧すといひ、人神を司牧すといふのは、此の謂である。即ち諸の種族には、各その風習傳承があるが、それを總括するには、自然に諸種族に通じて行はれるべき法がなくてはならず、又彼等の信仰を統率する眞理、即ち道がなくてはならぬ。堯典や舜典で、王者が特に天の運行を察し、刑僻を大切にするのは、此のためであつて、天岩戸の前で、八百萬神が素盞雄尊を追放に處したのも、やはりこの正義を實行しての事である。

天然についても、人事に關しても、法、則、道、Dharma, Lex などいふ觀念が出来るのは、此の階段にあつて、此は即ち社會が單純な種族血族團結以

上に進んだしるしである。勿論、此等の法を祖先傳來とも見るが、又此を天道とし、神の則、神の威徳、真理の法とする様になつて、社會團結も宗教も共に永遠の基本に接觸して來る。此の場合に、法や道が偶然に出來たものでないといふ觀念は勿論あるが、それが永遠又遍通だといふ意味は十分に明白でなく、その法は主として、一王の下にある一國民の範圍に行はれるものである。その場合の社會團結が國民的である如く、その間に行はれる宗教（法の信仰とそれに伴ふ行事）は、又國民的宗教であつて、その内容では法律的である。その信する神靈や、又その奉ずる法は、必しも一局部で一時だけのものとするのではないが、而かもその十分の効力は、國民といふ範圍に限られる。支那人が自ら中華の民と信じたのは、その奉ずる道が他の國民のよりも秀逸で、彼等も終に此に服するに至ると信じたからであるが、而かも他國民は、やはり蠻夷であつて、道的主人公は中國にある。印度の法も同様で、主として貴種、婆羅門並に武士の法であり、下民は半分しかその徳澤に浴しない。

兎に角、國民的宗教には真理といふ觀念は已に萌しては居るが、それは必しも人々の自覺省慮に訴へて真理と承認せられたものでなく、又その法律には權威はあるが、國民の範圍以外に及ばず、又他國民の法との關係は明白でない。ユダヤ國民の如きも、後には唯一神の法が萬國の朝宗する所となるを信じたが、そこに至るまでには、自國の神法に對して、他國の神や法は、實在はしても、劣等のものとして、之と相隔離する事を勉めた。然しながら茲に注意すべきことには、この状態の國家團結を、現實の方面から見れば、王者と臣民との權力關係の様であるが、此の關係を結び附ける法の觀念には、既に遍通に正義又は道といふ觀念の萌して居る一事であつて、此の一事が人々の自覺に上る様になれば、法律的關係は信仰理想の關係となり、その宗教は

即ち遍通の信仰、世界的宗教となる。

遍通の信仰といふのは、種族や國家の團結を打破するものではないが、又必しもその束縛の中に蟄伏しないで、人の至情に訴へ、人道の根本に溯る謂である。而して此の如き信仰は、實に先の種族宗教や國民宗教の如くに、團結や制度、歴史で出来るものでなく、特別な個人の自覺から湧いて出て、心から心に傳へる力が最も多きを占める。而して世界の歴史上此の如き自覺、此の如き特別な精神的偉人の生じたのは、不思議にも西暦紀元前六七世紀の間に集中した觀がある。孔老、釋尊、ザラシユストラ、イサイア、ソクラテースの出た時代と、又此等聖賢が人間の精神に自覺を喚起し、信仰を興へた消息とを考へて見れば、國民的宗教の中から如何にして遍通の教へが生じたかを知り得、又そのある者は、傳道の間から如何にして世界的宗教になつたかを知り得やう。後にキリストが出て、『我れは神の法を破壊せんために生まれしにあらず、成就せんためなり』といつた通り、此等の聖賢は、或る點では國民的宗教に打撃を加へた。但しその打撃は破壊でなく、國民的宗教の狹隘な局限を打破して、その中に尙一層深遠で遍通な信仰の基本を發揮し、自己の自覺を以て他を率ひやうとしたのである。それ故、此等聖賢の遺教は、後には國民主義の狭い方面に引き込まれた點もあるが、而かも少局限を破つて精神界に新鮮生々の意氣込と、深遠な理想を吹き入れた一事に至つては、その功と志と、共に没すべからざるものがある。

今茲には此等聖賢について一々縷説はしないが、日本では最も現實的で又穩健と見られて居る孔子について、この消息を少し示さう。孔子は、一方には保守的思想家であつて、その教へは皆、支那傳來の社會的道德に基いて、祭祀儀禮の事は勿論、孝悌忠信の徳も、やはり社會組織に基いた道德として教へて居る。而かも此等の道が、單に一社會一民族の中に偶然に出來上つた

道徳でなしに、社會の統治も道徳も、皆天意に基き、遍通の道から出て居るといふのが、自分の確信であり、又此が世を救ひ人を教ふる道だと自覺して居たのである。窮しても天が己れに徳を下して居るを信じ、時によつては天に祈り天に叫び、又天意を伺ふためには周易の研究にも従事し、人生の政治、道徳、行事皆この一元に出るべきを信じてをられた。それ故に、人君の徳たる仁を説くにも、君子人の道たる忠恕、その他の徳を教へるにも、決して之を法律的に見ず、精神の奥、人心の至誠にその源を探り、而してこの源は終には天理、遍通の道に歸着すべきものとした。子思が中庸の開卷に、天の命、人の性、道、教の關係を簡明に叙したものは、實に孔夫子が信念の永遠な眞理を闡明したものである。勿論、孔子には國民的方面の考へは十分にあつた。然し中國の道は、終に九夷八蠻をも感化すべきを信じ、又道が天下に行はれないのを見ては、東海に浮んで去りたいとの嘆聲をも發せられた。孔子の儒

教には、一面國民的の方面もあるが、その根本には世界人道に遍通の信仰があつて、そこに一種の世界的宗教たる素質は具はつて居る。その教へが日本に入つては、日本の道となり、日本人の道念を發揮し涵養し得たのは、その特別に支那的國民的の方面でなくて、實にその遍通宇宙的の方面である。水は方圓の器に應じて色々になるが、方となり圓となるのは、水の水たる所以が遍通の流動性にあるからではないか。

その他ザラシユストラの教は、その國民拜火の信仰に精神的の基本を發見して、清淨、光明、眞理の教とし、イサイアは、ユダヤ國民が、自ら特別な神の選民として、自國の神法として自ら誇つたものを、人々その心の中に發見すべき神の教へ、又世間萬國を光被すべき神の威徳だと宣揚した。ソクラテスは、ギリシヤ人在來の神傳祭祀よりも、人々の内省自省に重きを置いたために、同國人に嫌はれ、鳩毒を仰がざるを得ない様になつたが、而かもそ

ハルシヤ
ユダヤ、
ギリシヤ
の聖賢

佛陀釋尊

の教へは、古來國神アポロの殿堂に掲げてあつた『汝自らを知れ』といふ一事を自分並に人々の自省に實行しやうとしたものである。佛陀釋尊の教に至つては、人心自然の煩悶たる無常の厭世觀から溯つて、終に人心の奥にある、水に溺れず火に焼かれない靈光に接し、且つ古來婆羅門が社會的法律として居た達磨 Dharma 即ち法を、萬法に通じた法、三世を一貫した諸法の實相に歸着せしめて、その所謂一乘一貫の佛法を宣揚した。(根本佛教、特に二、三、四篇を見よ)。此等の教への中、傳道的精神を發揚して、眞に世界的宗教の行動を執つたのは佛教のみであるが、その外の宗教でも、その世界的福音は色々に發展して、人心の生きん限り、その徳を及ぼし、その光を放ち、或は各國民の道德に適應しつゝ之を感化し、或は後代の思想に餘澤を及ぼして、人類の文明を沾ほしつゝある。

此の如く、國民的宗教は、種族的宗教を遍通の方に發展し、世界的宗教は

種族的、國民的、世界的、宗教的、關係の増上

又國民的宗教の内容を、世界的人道的にして、一層遍通の基礎を與へる。而かも國民的宗教は、必しも種族的宗教の意味を全く滅却するものでなく、その中に存在する種族團結の意義を押し擴めて、諸の種族に通じた法の信仰を與へたもの。それと同じく世界的宗教も亦、國民的宗教の信仰を一層深く探り、遠く及ぼして、單に國民の信仰として通用するといふより以上の意味を與へて、それで國民的宗教の理想内容を發揮したものであるから、その遍通を又翻つて特別な國民生活に應用すれば、各々その特性と需要とに適應する感化を與へ得るものである。番に特別な國民性に適應するのみならず、世界的宗教の主義で國民生活の内容を豊富にし、弘く高くし、又國民特殊の傳承や風習で垢のついたのを淨めるのが、世界的宗教の役目である。それ故に世界的宗教といつても、漠然と世界的なものでなく、その行はれる國土と時代に順應して、各々特別の色彩を帯びるが、それは國性に順應する方面があると

共に、又その國民、その時代を指導して、向上せしめる力があるべきである。即ち各國民各時代は、此の如き世界的宗教に對して、各自特殊の要求を提出して、それを充たさせるか、又その要求を根本的に充たし、その特色を進めて、世界の文明、人道の遍通な内容に進むべき光明を、此の如き宗教から得るべきである。此の如くするのが、即ち國民が國家を作る所以の目的であり、又その文明を發達して、文明を有して居る國家たるのみならず、世界の文明に貢獻する所以の道である。

要するに、國民が、自分の中から此の如き遍通の宗教を生み、又は此の如きものを容れ得る間は、その國民には世界に處する生命があるのである。それと相對して宗教も亦、色々の國民に順應し又之を指導する力のある限りは、その宗教は、世界的宗教たる生命を有して、尙發達し得るのであるが、各國民に順應する方面のみあつて、之を教導し得る力がなくなれば、國民的性質

の埒内に屏息してしまつたのである。日本の如きは、まだ此の如き世界的宗教を生むに至らないが(主義ではあるとしても、事實ではまだない)、而かも過去には儒教を容れ、佛教を採り、皆之を同化し、今亦キリスト教も同様に我がものとしつゝある。此が日本の國民的生命に、尙ほこの方面に發達する力のある證據であつて、將來にこの國から世界的宗教を生み、他國に感化を與へ得べき生命を今方に養ひつゝあるのではないか。勿論、儒教と佛教も國家的となつて、現状では餘りに屏息の状態にあるが、それ等の教には世界的に發展すべきものがあり、且つ此が日本の新たな生命と、キリスト教との接觸で、その新芽を萌き出すべき徴候はあると信ずる。此を養ひ此を發達し得るや否やは、日本人がその精神理想の力を試みるべき好試金石であつて、その結果として出るものは、勿論日本的であるが、狭い鎖國保守の日本的でなく、開國進取の日本的として、世界に何物かを與へなければならぬ。之に反して、如

何なる世界的宗教であつても、終に一國民の埒内に塾居しては、世界的の生命のなくなつたもので、西藏の佛教の如きは、その好適例である。我々は日本の儒教や佛教を西藏佛教の如くしてはならぬ。その様にならない様にするには、日本の立場を守りつゝ、又日本から世界指導の光明を放つべき雄大な覺悟を以て、開國進取の國是を精神的にも遂行すべきである。

* * * * *

尙一つ世界的宗教について最も大切な事は、その傳道的精神と、それに伴つて必然に生じて来る共同融會の精神である。儒教にも多少の傳道的精神のあつたことは、前にも一寸述べ、又ザラシユストラも兵力で傳道を試みたが、此の精神を最も能く發揮し實行したのは、佛教とキリスト教とである。此の二教の精神とその傳道の事業とについては、今一々縷説しないが、佛陀が弟子を四方に派した宣言(根本佛教第十篇三章を見よ)に次いで、阿育王が傳道の事業

(森博士著、阿育王事蹟、一六九頁以下)、並にキリストが布教の宣言(マタイ傳廿八の一八一—二〇、マルコ傳六の七以下等)に次いで、使徒パウロの傳道殉教や、その後のキリスト教傳道史の事實は、人間精神の最も雄大な發表であると共に、又世界の文明を左右した宏大の勢力たる事を能く認めなければならぬ。日本人の開國進取も、兵力の勝利や經濟の進取と共に、終には精神的進運に於て、この傳道的精神を發揮して來なければ、まだ半鎖國的たるを免れない。教育者は、勅教を尊崇するといつて居るが、勅教の宣せられた中外不悖の大道に基いて、此の如き傳道的精神が教育社會に一分も見えないのは、何の故であるか。(この點については最後に勅教と宗教との章に述べる)。

共同融會の精神は、一方傳道的精神の必然な結果であると共に、又此が即ち國內にあつては、同胞共濟の心となり、外に對しは、世界の文明、人道の活現に對する進取と大同情との氣象になるべきである。この點は、戊申詔書

に『東西相倚り、彼共相濟し、以て其の福利を共にす』とも、又『益す國交を修め、友義を惇し、列國と共に永く其の慶に頼らむ』と宣せられた大精神と同じ事であつて、國家は各その獨立と特色とを維持しつゝ、而かも世界に處して、列國と共に文明の德澤に浴すべき以上、單に經濟の交通や外交上の辭令のみでなく、精神の根本に、人情の和合、情操の同情、思想の交通がなくては、眞の國交とは云へず、又眞に文明の德澤に浴することは出来ない。而して此の共同の精神を發揮し増長するには、他の方法も必要であるが、世界的宗教の興へる如き、大信仰と大理想とに基かなければ、確かな根のあるものとは云へず、又それが實行的に、傳道や共濟の事實に發表しなければ空に終る。教育に於ても、戊申詔書の御精神を、雄大な意氣込で社會に吹き込み、人生の活動にその實行を促して行くには、その根柢に世界的理想を貯へなければ、實利實益だけの教訓勸誡となり了らう。

この事に關聯して述べておくが、日本では、キリスト教の傳道とその經費とについて、狭い量見から猜疑の見方が多く行はれて居る一事は最も悲むべきである。キリスト教に於ける傳道と共濟との精神は、その歴史と離れない事であつて、ロマ帝國開教の初三百年間、各地の教會がこの二方面に盡した事實は、萬世の後人をして感奮讚嘆せしむるものがある。且つ又近世三四百年の間世界交通の發達と共に、この精神と事業とが、キリスト教國民の間に勃興して來たのも著しい事であつて、日本に於ける明治のキリスト教傳道はやはりその一部である。ニコライの會堂に大砲を据ゑる附ける用意があるなどいふ猜疑は、十數年前の夢に似て居るが、それに似た考は、今日尙キリスト教傳道費の上に注がれて居る。キリスト教徒が孤兒院で孤兒を養ふのを見て、子供を絞るのだと疑ふ支那人の愚は、必しも隣國の笑ひ事でない。勿論宣教師の中には、いかゞはしい行動の人もある、又傳道費の中には不淨の動

機^の交つた一分もあらう。然し全體として云へば、世界的宗教の傳道を共濟の精神から出たものとして見れば、此の如き猜疑や懸念は、實に疑心暗鬼の所産である。外國の教會に行つて傳道費を集める説教會を見れば、此の様な暗鬼は生じ得ない事である。よし又、此の懸念は正當の事であつて、傳道の動機には疑はしいものや、宣教師にいかゞはしい者があつても、それ位の小事のために破られる日本國の團結であると思つての憂であるか、然らずは杞人の憂でないか。何れしても小膽の譏りは免れない。誰々と名はいはないが、アメリカの宣教師で、日本に來た時には、日本人の精神を惡しざまの方面のみ觀察した人が、後には非常に日本人に同情し、之を尊敬する人になつた實例も決して少くない。我々には、それ位の長所もなく、又同化の力も乏しいかの如くに、外國人の傳道にびく／＼するのは、要するに世界的宗教の眞味を識らないのと、又一つには自ら信すること薄きためでないか。然し斯く

いへばとて、徒に外國宣教師を回護し、又外國からの傳道を歓迎するのでない。否その反對に、こちらから傳道費を出して、外國に宣教する方に進むのが、我々の理想でなくてはならぬ。朝鮮のキリスト教傳道の如きも、追々は日本のキリスト教團體からするがよし、又今日佛教の傳道が西洋に行はれ、佛教の僧院がスイスに出來、佛教の學校がロンドンに出來て居る様に、日本から出た世界的宗教の大傳道が、世界各地に行はれる様にならなければならぬ。國家と人道との關係につけて序でに此の事を述べておく。

四 現實と理想、現世と彼岸

今までは人生の活動を、云はゞその方式輪廓の方から觀察して宗教の位置を論じて來たが、これから進んで、少しその内容實質の方に入らなければならぬ。即ち世間の實生活に對して、宗教が與へる出世間の理想を觀察し、人生のこの兩面を總括して見たい。

人生は現在の事實で、その生命は身體と社會生活とで活き、而してその精神作用は最も明白に感覺の事實に現はれる。此は現實、即ち現世の實相である。そこで随分多くの人は、此の現實以外又は以上の事を言ひ又考へるのは、無用の空想か、然らずんば虚偽の申分だと斷じ、宗教で彼岸だの理想だのといふ事に拘はるのは、迷か又は愚だと論ずる。

一つ譬喩を出して見やう。我々が現實に草木と見るのは、その幹や枝に葉や花であつて、根は見えず、而して幹枝花葉は光明に向ひ、見える方にのみ延びるが、根は光りを避けて隠れる様、隠れる様に這ひ込む。茲にも現前と隱微との對照が、我々の眼に見える現はただでなくて、根幹枝葉自らの性質傾向にも具はつて居る。枝葉だけを見て、植物の全體だと斷ずるのも間違ひなれば、根だけが植物の生命だといふのも誤りである。二者は方向を異にして、上と下とに相背く様に見えるが、植物の生命は兩方の相依相輔で維持出来るのである。又他の例を取つて云へば、無線電信は、その受信器を備へ附けた處にのみ聞こえて、その外には見えも聞こえもしないが、この不見不聞の電波は、我々の知らない間に我々の頭上を往來しつゝあるのである。磁氣の流れも同様であつて、その働きが現實となるのは、磁石にあるが、その流れは遍く流れて、而かも觸れられず又見えない。物理で潜勢力といふのも、

此と同じであつて、隠微、沈隠、人の耳目には觸れないで居ても、事情が具はれば顯勢力となる。現はれないからといつて、潜勢力は無いものと斷ずることは出来ない。

獨り物理上の事のみならず、精神上的の事でも亦同一であつて、現實に人の意識に現はれるのは、極めて僅少の内容のみであるが、記憶に貯へた事は、常には現はれずに居ても、事情に應じて現はれ、又一々の時に意識に現はれる裏面には、副意識或は意識線下の我れと稱する働きが活潑に動いて居るとは、近年の心理研究で段々明かになつて來て、心理の上に一變革を行ひつゝある。この線下の我れといふ意味を、一つ譬へて説明して見れば、伊豆の熱海温泉は、湧いて出るのは熱海といふ地點にあるが、その源泉は地下にあつて、遠く大島の三原山と連つて居、此の連絡は水平線下にあつて直接に見ることは出来ない。線下意識も此と同じ様に、色々の方に擴がつて、人々の

意識と副意識

現實と理想

間にも、時としては或る聯絡を表はす。兎に角、現實といふことは、外界の經驗にしても、内心の意識にしても、事實活動の極小部分であつて、此等現實の奥に潜み、基となつて居る隠微の働きは、實に宏大なものがある。此の隠微の勢力を彼岸といひ、即ちプラートンの觀念世界、それが我々の精神を支配する力となれば、之を理想と呼ぶ。經驗主義を貫徹すれば、どうしても感覺の事のみを實在とする現實主義となるが、その立場では此等現實の依つて出る根柢と聯絡を保つことは、出来ない筈である。然るに如何なる經驗主義者でも、こゝまで貫徹せずに、何か法則とか、根本性質 Primary quality とかいふものを立て、自己の立場を曖昧にして居る。加藤弘之博士の天則論の如きはその適例である。

* * * * *

現實と彼岸との關係は、又差別と平等との關係になる。現に實在するもの

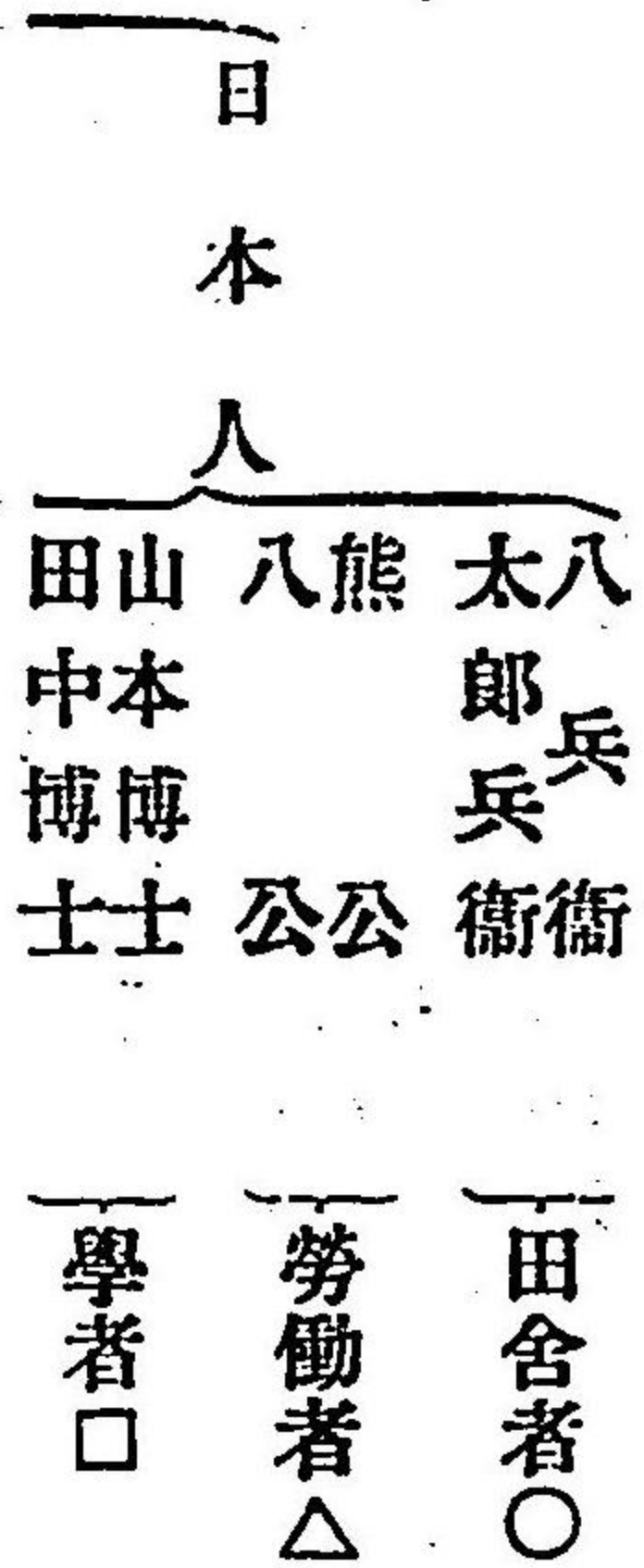
現實と理想、現世と彼岸

差別相と平等相

で個々の特性を具へ、又特別の事情で存在しないものはない。十人十色、人の心はその面の異なると共に異なる。草木一つでも、各々特別獨立の生存を營み、石ころ一つでも、特殊の形や位置を有しないものはない。此の點からいへば、萬物萬事皆差別相で出來、差別相を離れて物は存在しない。然しながら差別特性のみが實在ではない。人は面の異なるに従つて心も異なる。世界の人類で二人として全く相同じといふ人は古往今來にないが、而かも亦、十五億の人間で全く相異なるものはなく、どこかに人間として共通點はある。獨り人類ばかりでなく、人類と色々の動物と、どこかに似通つた類縁や親縁があればこそ動物學者は、動物として(即ち動物性といふ共通、平等相を捕へて)之を研究し得る。動物と植物との間には、細胞生活といふ點で、又は植物と動物との間には、その化學的成分の上で、どこかに相似るばかりでなく、又相通じた平等相がある。此があるから、植物は鹽物の溶解を取り入れて自分の

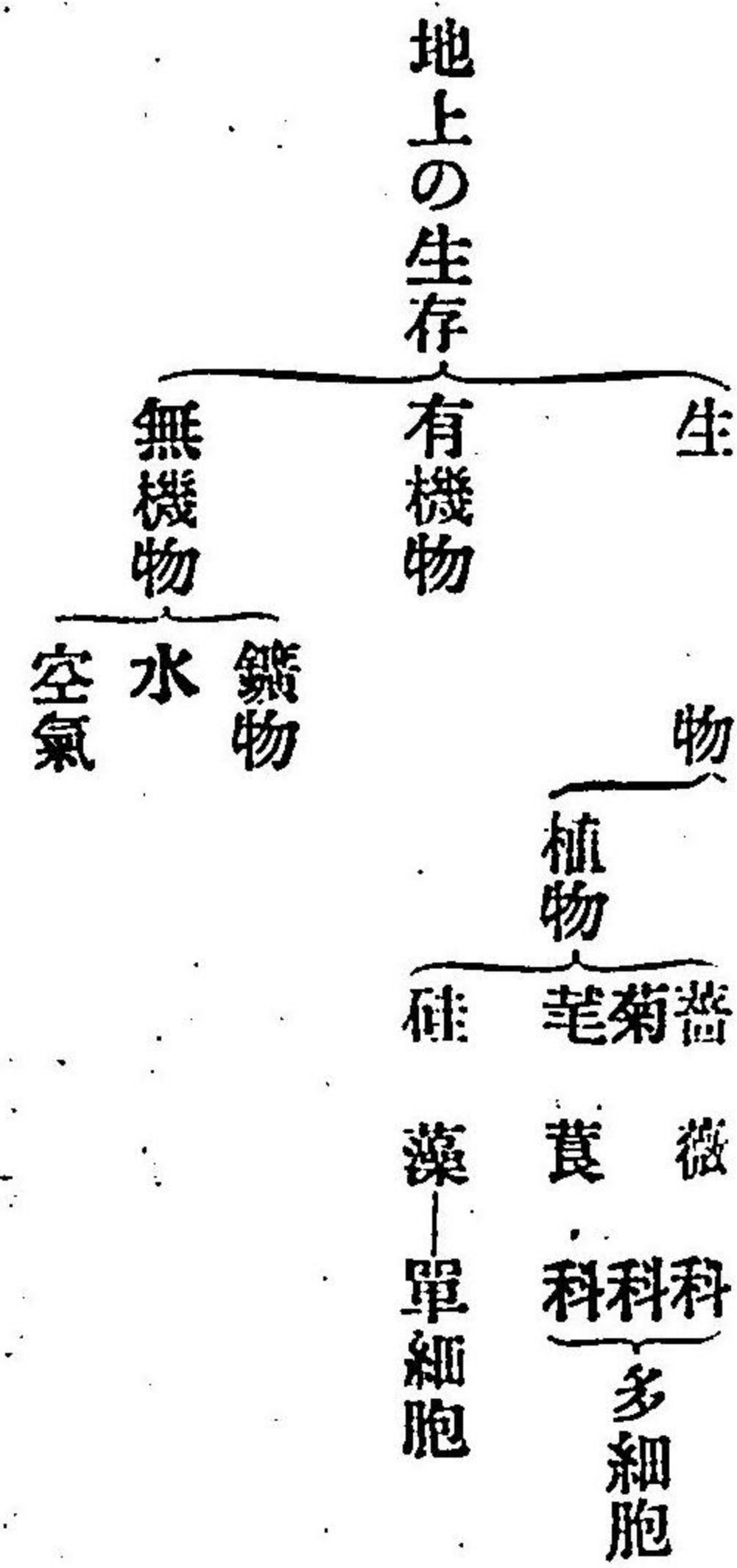
差別と平等との融通

養分にし、又動物は植物を消化して自らの生理作用に資する。その様にして萬有萬化、各々その特性に於ては相胃し難く、混淆してならぬものがあるが、それと共に、全く別に、全く孤立といふものは、廣い世の中に一つもない。勿論これ等の平等相も亦、必しも何物をも直に一樣にしてしまふのでなく、動物としての平等性と、植物の普通性とは違ひ、何れの平等相も、皆各々その部類方面に従つて範圍を異にして居るが、又此等の諸の平等相の間にはそれ以上の平等がある。プラートンは、差別と平等との關係を、觀念の立錐形として居るがその意味を圖にして見れば、一例左の如きものになる。



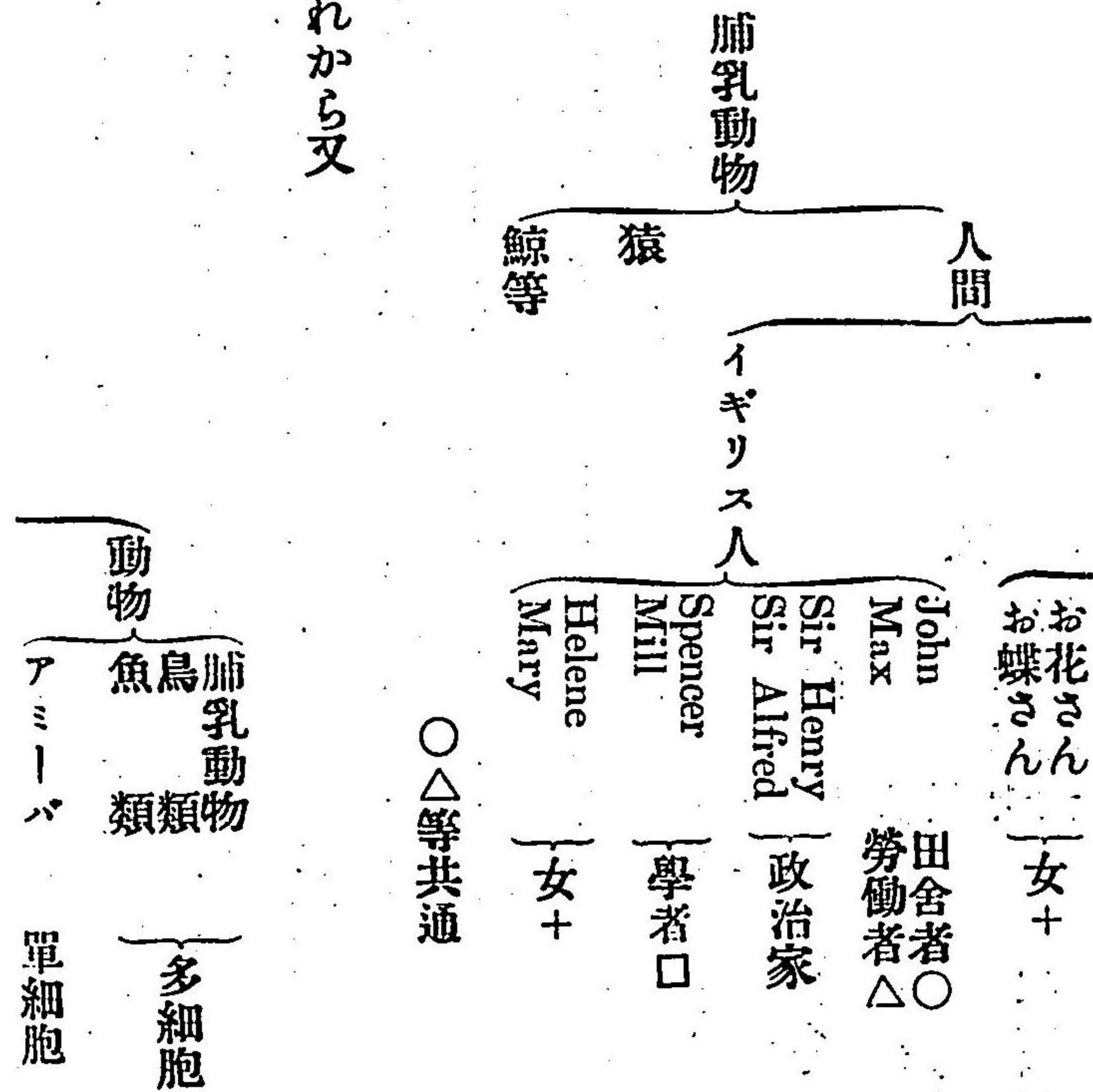
かういふ工合に、平等と差別と、即ち個性と共通性とは、互に、犬牙錯雜して居る様であるが、その間には整然たる上下秩序の關係があつて、互に相貫さず、而かも相融通する。此等の點は、先に個人と社會と並に國家と人道との關係についても説明しておいたが、現實といへば、この差別の方面のみを指すことで、平等相の方は如何なる低度の共通性でも、決して現實でなく、現實の裏に隠れた彼岸、現實の目標となる理想である。例へば人間は各々個

現實と理想 現世と彼岸



宗教と教育

それから又



人の特色を發揮すべきであるが、此の差別相は又同時に圓滿な人性といふ方向に向ふ一つの路であつて、人性といふ觀念の平等相を理想として云へば、即ち完成した人間といふ事になる。勿論、總て人性を圓滿に具備し開發した人といふものは、現實にはどこにもないから、此の如きは即ち理想であるが、然し又各々の人がその特性を發揮するといふのも、此の様な理想的人格を色色の方面から發揮しやうとして居るのである。例へば、忠臣といつても、全然理想的の忠臣はないが、楠公も、大石良雄も、和氣清磨も皆、我々が抱いて居る忠臣といふ理想のどの方面かを實行した人であるから、現實の忠臣なので、現實の忠臣は、又實は忠臣といふ理想を離れ得るものでない。平等と差別との關係を明かにするには、大分哲學論に入らなければならぬから、茲には之を略するが、兎に角、差別といふは現前の事實相であり、平等といふのはこの事實に先つて存する理であつて、此が我々の心では觀念又は理想と

して、髣髴の間に念頭に往來し、而して事實の世界には、彼岸の根抵、又法則として行はれて居る。

* * * * *

差別といふのは現實目に見ゆる事であり、平等相は理性に訴へる事であるから、多くの人は、平等と云へば唯心で作ることと考へてゐるが、若し天然の物事なり、人事の活動に、平等相が實際存在しないならば、人間の理性も亦これを捉へる事は出来ない筈である。何れの科學でも、其の研究に依て發見した眞理法則をば、單に心から作り出したこととせず、事實外界に行はれてゐると見るが、科學の研究も、理性で發見した眞理と外界の事實との間に或る一致があるとしなければ、成り立ち得ない。即ち科學と云へども、其の研究する事柄は、現實の事實であるが、其の研究の根據と結果とは、平等相にある。例へば一つの結晶を取つて、それが何れの種類に屬するやを定める場

合に、結晶の軸と云ふことを念頭におき、それを標準にして、結晶の性質を定める。此の軸は現實には見えないものではあるが、我々が結晶を研究するには、軸と云ふ觀念を離れては、科學的に其の性質を定める事は出來ず、結晶其のものに軸が見えないが、而かも何か此くの如き根據が先天に具はつてあるから、結晶も一定の形を得るのである。これはほんの一例に過ぎないが、要するに科學研究は、我々の精神に先天的に具はつてゐる平等相の觀念に基いて、現實を觀察し、而して其の物事自らの中に平等相を發見するにある。科學者が何か疑問を起して、研究の方針を立てる場合には、まだ何物とは明かに見込みはつかないが、こちらの觀念にばんやりと現はれてゐる平等相が事實存在しないかと云ふことを探り求める。斯く求めつゝある間は、平等相は一つの理想に過ぎないが、其の理想が事實で確められ、實際物事の間此くの如き平等相が行はれて居る事を發見すれば、先きの理想觀念は事實の眞

理法則となる。ダーウキンの動植物の研究、メチニコフの單細胞動物研究、或はキュリーの放射作用研究など、科學の新紀元を開いたやうな大眞理は、其の初め研究者の觀念世界に、髣髴として浮んで來た見込みを、現實にためして見て、疑問を解釋し、或は見込み通りの平等相を發見したのである。

科學の眞理と同じく、平等差別の關係は、人間の間で思想感情の交通に最もよく現はれてゐる。例へば教育者が子弟を教育するには、二人の間に人格の違ひがあり、知識の差別が存在するのは勿論で、これは即ち現實の差別相である。然しながら、差別以外に平等相がなく、師の教へる事が弟子に通じ得ないならば、教育の感化は施し得る譯がない。師弟の間にどれだけの共通點、即ち平等があればこそ、學科の授業や、又人格の感化も行はれるのである。教育は被教育者の心を開發するにあると云ふが、師の心には已に明かになつてゐる知識は、未だ弟子の心には眠つてゐても、これを引き出し、覺

醒し得るのは、兩者の間に平等性があるからである。此くの如く平等性が兩者の間に通じてゐて、師も此の平等相に依て教育を施し得、弟子もその教育を受け得る性質が、自分の中に存在してゐるから、教育を受け得る。而して其の結果は、被教育者の個性を開発すると共に、又教育者の感化を興へて、差別と共に平等が、又平等と共に差別が發展して來るのである。

人倫の關係
其の外、夫婦、朋友など、人倫の關係も、亦これと同様であつて、人格の差別相は現實存在するが、而かも其の間の平等が、夫婦なり朋友なりの關係を結ぶ。單に現實から云へば、男女相異り、夫婦各々個性を備へてゐる。然るに男女の間に、或る平等相が先天的に存在するから、其の間に生殖も行はれ、子供も生まれ、又心に於て相理會し同情し交通し得る。平等性が先天的にあるから、夫婦相和して、所謂異體同心の一對となり得るのである。親子、朋友その他の關係もこれに異なる事はない。

人間の生活は、個人各々差別相を備へて、而かも平等相に於て相交通して、始めて社會的生活を爲し得る。古人も云つた、人間は社會的生物であると云ふのは、即ち此處の事であつて、個人に個性が備はると共に、其の間に思想感情の交通が行はれ、共同の意識が結合力になつて、人倫は成り立ち、社會は團結して行く。此處にも人間の平等相が現はれてゐるが、而かも此の平等相と云ふのは、人間が漆と膠との如く、べた〜に一緒になるのではなく、人各々の差別相を保ちつゝ、平等の點に於て一致し結合するのである。それ故に道德の事を考へ、社會の生活を論ずる上に於て、平等差別の關係をよく領解しなければ、決して正しい見解を得る譯はない。而して平等と差別との關係は、又理想と現實との關係であつて、現實の道德、社會生活は、根本に於て何か先天の平等相があり、歸着點に於ても、此の平等を實現する理想に向ふ。即ち現實のみを見る人は、人類生活の根據と歸着とを失つて了ふ。

此くの如く、現實と理想、差別と平等との關係に基いて觀察すれば、科學の眞理も、道徳の生活も、決して現實差別だけの事ではなく、其の大本に於て何か平等の基礎があり、理想の歸着がなければならぬ。此の點に着眼しない科學は、畢竟皮膚だけを見て人間を研究し得たと思ふ如きもの、又理想の歸着なき道徳は、花の麗はしいのを見るのみで、それが實を結ぶことを見ず、又根を張つて生々絶えない力あることを知らないと同様である。それ故に、教育に於て、智育の根本を科學の基礎に置くのは、勿論缺くべからざる事であるが、科學にも、理想の根據のある事を忘れてはならぬ。それと同様に德育に於ても、現在に基いて道徳の實行を勸めるのは、勿論必要であるが、其の根底と歸着とには、彼岸平等の理想世界ある事を閑却しては、眞の德育は行はれない。今の教育は、科學研究の結果と國民道徳との基礎に立ち、教育としてはこの原則に従つて、仔細の研究をも遂げ、又自信を以て進んで行かなければならぬ。然しながら、其等の科學や道徳の根本には、今云つた如き理想の土臺ある事を體認して、智育德育を行ふ上に於て、常に此の大本に着眼し、又理想の力に接觸する事を忘れてはならぬ。

そこで宗教は、其の外形や組織歴史宗義などに於て、色々相分れてゐるが、何れの宗教も、其の根本精神とする所は、個人の精神を平等遍通の理想に接觸せしむるにある。色々の種類の神靈精靈、或は佛、或は天、此等はこの理想を色々の方面から捉へやうとしたものである。單に理想と云へば、生命のない、力のない者のやうに聞こえるが、これに生命を與へ力を與へて、個人をしてこの生命の中に生きてゐることを自覺し、この力に依て活動せしめるのが、宗教の目的である。勿論宗教の種類に依つては、極めて幼稚或は偏狹にこの理想を捉へてゐるものもあるが、其等は發達の程度の低いもの、或は又

高い所から墮落したものであつて、眞に勢力を得、廣く感化を及ぼす宗教は、理想の生命と力との強く又深く及んでゐるものである。

其等の一々の觀察は此處に略するが、概括して云へば、先きに述べた如く、國民的宗教は差別相が多い爲めに、理想を近くに取り、精神的宗教は多く平等の方に進んで、理想を遠大にする。この二種類には、各々一長一短があつて、國民的宗教は、現實の國民的生活を維持するに都合の好い點が多いが、其の爲めに保守的になり、理想が低く、着眼が狭くなる愛がある。これに反して、世界的宗教は、理想に於て廣大遍通であり、従つて國民を指導するに遠大なる理想を與へるが、現實の國民性や現在の社會状態と離れ易い傾向がある。先きにも述べた如く、個人にしても國民にしても、其の生活には、繼續性と革新性との調和を必要とするが、一國民の立場から云へば、其の宗教は、國民的特性の繼續を必要とする點に於ては、國民的宗教を要し、其の進運を助け

抱負を大にし、理想を高めて革新性を發揮するには、世界的宗教の感化を要する。この二つの力が能く調和して行く國民は、立派な國民であり、又この二つの方面を備へて、應用自在な宗教は、宗教として國民生活の力になると共に、又世界的感化を與へる宗教である。此等の點を、日本現在の宗教に就て觀察し、批評する事は、後章日本思想の觀察に譲つて置く。

尙一つ附けて述べて置く。宗教の信仰が現在を捨て或は厭世に傾くと云ふ事は、屢々聞く非難である。これは勿論道理のある非難であり、又宗教の中には、現在を離れて、只管平等に馳せ、現在を無視するものゝあるのも事實である。然しながら、その反對に、現實を尊重する科學或は實世間を尊重する道德が、宗教の反對に、何處までも亦何人に對しても、感化の効力があるとのみ斷じてはならぬ。現實を離れると云へば、直ちに空想と考へる人が多いが、人間は現實に拘泥する爲めに、差別に囚はれて、所謂現實の奴隸となり、

平等觀の
効力

或は實世間の道德を重んずる爲めに、遂に功利一偏の道德説に陥り、形式に囚はれ、或は又現實の慾望を基礎とした紛擾に支配せられて、出路を知らな
いと云ふやうな事にもなる。平等觀、厭世觀は、そのみを主義とするやうに
なつては、勿論人生の害をなし、又宗教自らの精神に背くが、而かも亦現實
の執着、慾望の葛藤を打破する爲めには、平等觀には人を高める力があり、
厭世觀には一種通氣法的の効力のあることを忘れてはならぬ。思慮分別に迷
ひ、利害得失に心を苦しめる場合に、禪の如き方法で、一切の葛藤を打破す
るには、平等觀は、一種の清新劑たる効力がある。又厭世觀と云つても、只
人生が悲しい、社會の生活が面倒だと云つて、世間を逃げ出すだけならば、
何の効力もないが、一旦世間の歡樂に飽き果て、或は又不幸に沈淪した人
が、一切世間の慾を捨て、利害苦樂を超絶してみるやうな厭世ならば、これ
又腹痛の場合の下劑に似たもので、古來の聖賢で、一旦の厭世捨離から進ん

惡平等と
惡差別

で、遂に大なる感化を施した實例は決して少くない。

平等と云つて差別を忘れる平等は、所謂惡平等であるが、現實を重んず
ると云つて理想を忘れるのは、惡現實主義である。厭世は愚であるが、主義
も理想もない樂天は、俗惡の氣風、逸民の思想である。先きに述べた如く、
平等と差別、理想と現實とが、恰も木の根と葉との如く、又は磁流と磁石との
關係に似て居るとすれば、其の一面に偏し、他を忘れるのは、思想としても、
道德としても、共に愚に非ずんば惡である。宗教が、往々にして平等に偏し
厭世に傾くのは、弊であるが、科學や教育が、理想を忘れて、現實に偏する
のも、亦害である。古來科學上偉大の發見をした人を見るに、皆一つの理想
家であり、聖賢で教を百世に垂れた人は、多くは何かの捨離を経て居るのを
見れば、平等或は厭世と云ふ事も、必ずしも悉く排斥すべきものでない。

但し大多數の人は、此くの如き偉大な平等觀や、又は刷新復活の力ある厭

平等觀の
感化

世観に入るだけの力がないから、必しも其處まで行かないでも好いが、而かも此等の人々には、現實に囚はれ利害得失に苦しんで、出路を得ないことは、甚だ多いから、宗教的理想主義を按配して與へる必要がある。身體の壯健の人ならば、一時に下劑を與へて腹痛を癒す事が出来るが、身體の衰へた者には、少量の下劑を用ひなければならぬ。それと同じく、思想も淺く、意志も弱い大多數の人に取つては、一時に平等觀を與へず、現實主義の乳糖に少しづつ、宗教の甘桑を與へて、下劑にする必要がある。

何人と云へども、人の死を見て嚴肅の感を起さないものはなく、墓地に逍遙して、多少沈痛の思ひを抱かない者はない。人間生きてゐる間は、皆差別で動いてゐるが、死の港を船出し去つたものは、平等の海に入つたものである。さうして墓地は、現世の歡樂動搖に對して、脫離寂靜の姿を示す。この平等と寂靜に對して、眞面目の考への起るのは、人間の至情に基いたことであ

死に對する觀想

つて、現實の差別以上更に平等の彼岸を望む傾向を示してゐる。宗教は獨り死の事のみを説くものではなく、又人生は死の反對に活動ではあるが、而かも宗教が葬式を營み、死に就ての教訓を與へるのは、其の平等觀に基いた感化の力であつて、この感化が活動の人生に及ぼす影響は、實に大切なものがある。坐禪念佛の如きも、所謂る修養の道として、平等觀、或は寂靜の感化を與ふる方法である。此等の方法を行ふだけでは、勿論理想的の宗教ではないが、それ等の修養が或る種類の人々に對して、それ相應の感化を與へるのは事實である。如何なるものが、理想的の宗教であるかと云ふ事は、暫く別問題として、兎に角、宗教には平等觀が多く、厭世に傾くからと云つて、其の爲めに、宗教を全然有害だとするのは誤りである。惡平等が有害ならば、それと同じく差別現實の執着は、又人生の禍である。圓滿な人生は、この二方面の圓滿な調和にある以上は、宗教の平等觀、理想主義は、又人生に缺くべから

平等觀と精神修養

ざる力である。

科學の弊は現實執着にあり、道德の弊は形式拘泥にあり、而して宗教には又平等超絶の弊が附け纏ふ。現實に執着するものは彼岸平等の理想を忘れ、形式に拘泥するものは精神理想を閉却し、超絶に走る者は現實の人生に遠かる。それ故に、科學や道德、並にそれに基いた教育には、常に形而上的の理想を吹き込むで、高遠と自由との精神を與へる必要があり、宗教や哲學には現實に對する考へを離れない様にして、人生に對する實際適切の指導を與へる様にしなければならぬ。此の關係が圓滿に行はれるのは、平等と差別、現實と理想との間柄を正當に領得するを要する。この關係が圓滿に行はれるためには、教育の根本に宗教的理想の信仰があり、又宗教は科學と道德とを離れない様にして、人生の力となるべきである。此に就いては、少し信仰といふものの性質を尋ねる必要がある。

信仰を弘く見れば、何事かについて一定の信念あること。従つて萬事空だと悟り、又は現實の外に理想なしと斷ずるのも、一種の信念には違ひなく、又この信念がその人の生命を支配して、信する如くに行ひ、行ふ通りに信する人があれば、一種信仰の人たるに違ひない。然しなから信念の内容に立ち入つて見るに、例へば萬事空だと信じて尙ほ生きて居る如きは、信と行との矛盾であり、現實主義を奉じて、その信を貫徹すれば、親でも兄弟でも皆別箇の人間となるべきに、尙ほ多少でも同情親愛の生活をするのも、同じく不透彻の信である。即ち信念と生活とが一致するには、どうしてもこの生は己れ一人の生でなく、天地の間に或る位置を占め、或る事情の下に生きて居、又他人と同情交通の生活をして居るといふことを信じなければならぬ。此の如き信念は、即ち自分の生活を孤立のものとせず、他と共同することになり、

信仰の生
活

又總ての事を單に偶發廻はり合はせとせず、何かの秩序の中に動いて居るとすることになる。即ち人生に對する正當の信念は、後章に説明する通り、人生を慈愛と權威との舞臺とすることになり、自らの生命を天地人生といふ大生命の一部とし、その自覺を己れ一個人の生命に體現することになる。此の如きは即ち宗教的信仰であつて、己れの生命を、己れ以上、個人以上に亘つた大生命、遍流の生命の中に托し、その慈愛の中に生きて感謝徳の實を擧げ、又その權威に服しつつ、又自身の身がこの權威を代表することになる。此の如き信仰があれば、世界の事は單に現實として見るだけとは全く趣を異にして、己れ一個の生死や利害に亂されず、延びくと安らかな安立の地を得て來る。即ち總て現實の物事は理想の面影を傳へ、差別は平等の反映として見える様になり、何事も皆理想的の光りに照らされ、一切の現象には永遠の姿を見る様になる。水に漂はず、火に焼かれず、刃刀に傷けられない信仰

生命融會
の信仰

の生活とは、此の如きものであつて、孔子が「天徳を予に與ふ」といふ自信の下に、仁愛の道を行はうとしたのも、又多くの仁人志士が身を殺して仁をなし、命を棄てて理想のために盡したのも、皆此の如き信仰から出た生活であつて、此の如き人の生命は、現實一個人だけの生活でなく、道に隨ひ、道を代表する生命になる。一定の教理や儀式を具へずとも、此の如きものが即ち宗教的信仰であつて、宗教といふ名はなくとも、その實は茲に備はつて居、色々の宗教は、此の如き信仰が、特殊の事情の下に、特別の形で發表したに過ぎない。

キリストは、野の花一つを見ても、その中に無上の光榮を認め、空飛ぶ鳥も神の大能の現はれと觀じ、而して自らはこの神の子たることを自覺し體達して、そのためには身を棄てることを辭しなかつた。キリスト教の教には色々な方面があるにしても、一に皆この信仰の通りである。佛教の信仰も、畢竟

キリスト
教と佛
教との
信仰

は、此と實質を二にして、現在の佛陀は、法性永遠の現はれ、即ち如來であると信じ、自らも如來の使者、如來の遣はす所の者として、如來の事を行ひ如來の肩に荷はれて居るといふ安立勇猛の生活を送るにある。此の信仰の眼に映する世界は、即ち理想に充滿した世界である。法華經の藥草喻品にある如く、大中小諸々の草木も皆一雨の水に浴びを得て、紅紫色々の花を開き、甘酸種々の實を結ぶ。『いたづらにもる、草木もなかりけり、一味の雨の所わかねば』。『ふりしきる雨は分けてもふらねども、柳は緑に、藤は紫。』信仰の世界觀とは、畢竟この一味を味つて、自らの身に天地の生命を宿とす自覺を行ふにある。

斯く觀て來れば、宗教と云はず、道德と限らず、又科學や哲學にしても、その現はれの差別相現實相では、様々になつて居ても、その存在の根柢、觀念の大本に入れば、茲に遍通不變の平等理想に接觸して來る。此の如き理想

を元にしてこの人生を觀れば、人生の現實にも亦、平等理想の面影を見、現在の實世間にも、理想に安立した生活を遂げ得る。然らば、此の如き理想の見方で見た人生は如何なるものであらうか。此が次章の問題である。

五 慈愛と權威

無常變轉
と久遠不
滅

天地間の物事、人事の變轉、看來れば人間は變遷流轉の中に圍まれて居る。年々歳々花は同じくとも人は同じからず、頼みとした人の心も、秋の空と變るなど、考へ來れば、人生只現實あるのみとの感もしやう。然るにその現在現實も、水の如く流れては歸らず、矢の様に迅速に移り移る。過去は不動大磐石の如くに現在を嘲笑し、未來も望みの虹と共に追へば去る。飲め、食へ、只現在を樂めといふ心の中にも、やはり人生の岐路に立つて迷ひ且つ失望する念が、その裏面に黑影の如く立つて居る。然しながら、『源遠ければ流長く、根の深い老松は、空を突いて風雨を凌ぎ得るでないか。頼みないかの如く見える人生の中に、若し遠い源と深い根がなければ、我々は如何にしてこの現在をも樂み得やう。今の世に現實主義の人が多い。現實にのみ目が眩んでその源を思は

ないために、只管目前の利慾快樂に走り、或は又一轉して自暴自棄の自然主義となり、人生を咒詛する破壊主義となる。世の人は破壊主義の恐ろしい事を知つても、それが實は彼等の現實主義と兄弟たる事を思はずに居、知らずして相率ひて没落の淵に臨みつつある。この滅亡の危難から人を救ひ出だすべきものは、人生の遠い源を求めしめるべき思想、權威と慈愛とが天地人生の經緯として、過去から未來を一貫した大道、人生の至情に基いた大原動力たる事を深く體得せしめる一事にある。

人として親の子たらざる者はない、親があれば、親の親、又それ以上、遠く遠く祖先があるは云ふまでもない。人として親を思ふ心は、即ち己れが出た源を慕ふ心である。此の心を推し擴めて行けば、天地萬有の生命が依つて出る源を思ふ情にもなる。親からは慈愛、子からはその愛を受けたありがた

親子の愛
情

味を感じる心、その恩徳に對する感謝の情になる。勿論世には慈愛の薄い親もあらう、然し人の至情が自然に發露しては、子に對する愛情のないものはない、たましく慈愛の薄い親は、生活状態や何かのために妨げられた結果であつて、その中には一層悲むべく同情すべき事情が伏在して居るに違ひない。又世の放蕩兒、不孝者のよく云ふ言分として、頼みもしないのこゝろ、親が勝手に子を生子を育てたのだとも見られやうが、頼みもしない親の勝手であつた生命が、ありがたくも何ともないといふならば、そのありがたくない生命を惜むのは何のためであるか。世の中には自殺などで自己の生命を棄てる者はあつても、此れ亦事情の壓迫から來るもので、人として生命を惜まぬものはない。その大切な生命の源を考へて見れば、頼むだとか頼まないとかいふ事は問題でなく、頼むで始めて貰つたものならば、恩徳も薄からうが、頼みもしないにくれた大切な生命ならば、その恩徳は一層深く感謝しなければならぬ。

ぬ。

慈愛の恩徳と感謝の孝徳とは、人生親子の間に、最も明白に又確實に著しく現はれる。然しながら、生命を養ふ源は獨り肉體を生むでくれた生みの親だけではない。『涓水一滴も天地の力をこめ、米粟一粒も萬人の勞を集め』て居て、此の身體の生命は、飲食や、又その外衣食住の供給で維持して居る。此等の物資が出来るのは、勿論彼等に「一々これらを惠まうといふ明白な意志があつてするのでなく、所謂無心に自然の供給をするのである。然かも此等天地の産物が、同じく天地の産物なる我々人間の身體を養ひ、共に俱にその生を營み、相助け相依つて生々するのは、その根に生命の基を同じうする本があるためで、礦物質は水に溶けて植物を養ひ、植物質は、自分特有の生命を開展すると共に、又動物の身體に入つては、その植物的生命を營むで、漸次その上その上の高等な生命の土臺を養ふ。その間には、大きな意味での交感

融通が行はれ、天地人生皆この融通で生々して居る。(意志と現識としての世界、上卷廿三章、中卷廿三、廿七章参照。)之を詩人風に云へば、花に鳴く鶯、水に棲む蛙、天地の間に生きとし生けるもの、何れか歌、歌はざらんとも見得、又或る宗教の様に、天地を主宰する神の慈愛とも解し得やう。然し我々は態々無心のもを特に有心故造にせずとも、萬有の融通生々にも、共同の生命が現はれて居るのを見れば足りる。春の晨、夏の夕、天地の有情を詠する詩人の心も、必しも空想のみではなからう。又天地の主宰を信するものも、無下に貶してはならぬ。然し一々此等の信仰を現代の人に強ひずとも、人にして苟も自分の生命の依て基く源を思ふ心があり、この身體を養ふ生命の根底を疎略にしない考へさへあれば、親に對する心の一分を、この方の同情生活に向けて、所謂天地の恩徳を思ふのは、自然の至情ではなからうか。

共同生活
の恩徳

その上に、人間の生活は、社會の共同に依つてのみ營み得る。世には孤獨を

同情の生
活

好む人もあるが、その人は天然萬有を友とする西行法師となるか、さもなければ孤獨の極終に人を咄ひ世を惡む破壊者となる外ない。人の心は、喜ばしいにつけ、悲しいにつけ、之を他に云ひ表はし、他に感情の交通をして之を發露しなければ、胸に溢れ、思ひが結ばれて堪え難い性情を有して居る。社會の與衆同胞は、物質の上で有無相通じ、長短相助けて行く上での仲間同志であるばかりでなく、——此も勿論社會生活の大切な要件であるが、——又實にこの同情同感の交通が、人をして人間の生活社會的生活を營ましめる最も強い要契である。『云ほまいと思へど、今日の暑さかな』。云つても云はないでも、暑さは同じであつても、人の面を見ては、之を口にした、即ち思ひを共にし、暑さの苦みを頰ちたい。同じ苦痛でも、苦痛としての分量は變らないながらに、人と共に之を負擔すれば、感じは輕くなる。樂みも同様で口に感ずる美味は同一でも、人と共に之を食べば、樂みは一層深く、美はしい風景

も、一人で眺めては何となく物足りない。「旅は路づれ、世はなさけ」で、夫婦朋友など同情の深い者同志を得られない場合には、他人でも路づれにもなれば、話し相手にもして、それが樂みを共にする同情生活に大きな力になる。異國に居て、人に交つても言語や風習の違ひのために、十分自由に同情の生活をし得ない場合に、本國の人に逢ふ喜びも此のためである。自分の思想に確信あり、感情に溢れて居る事を古人の詩文などの中に發見しては、確信は一層強く、情は茲に深さを加へて、言葉で盡せない喜びを得るのも、此の同情生活の恩恵。孤獨の人は、その孤獨なだけ、自分の自らの生活が狭く、又貧弱な人で、同情の弘い人は、その同情の弘く又深いだけ、生命の廣大な人である。手近い例で云へば、我々が社會的生活の媒介として有して居るのは言語であるが、それは單に媒介であるばかりでなく、又實にその賜、祖先以來の遺物として、之を現在の同胞と共に共有し、又之を子孫に傳へるべき重寶である。そ

同情と精神の擴張

れ故に、自國の語は勿論、外國語でも、言語を通じてその魂を能く領解し、又之を交通に活用し得る人は、即ち同情の弘い生活の人、精神の富豊かな人。國語全體としても又一々の言葉にしても、その魂に深く入れれば、それだけ古人と他人との魂を自分の精神に深く汲み得て、その同情同感が即ち人格を弘く大きくする。言語を道具とした文學、人心の花たる美術、又は道義思想にしても、皆大きな人間社會の同情生活の發表であつて、その中に深く弘く入れれば、自己の生命はそれだけ大きくなる。人間が孤獨の動物でない以上、その社會的生活は即ち同情の生活であつて、人々は現代に於ては勿論、過去に對しても、將來に面しても、その心情交通に依つて大なる慈愛の中に生きつゝあるのである。社會的生活に現はれて居る同胞の恩徳を思はなければ、人間はそれだけで、半分以上人間たる資格を放棄したものと云つてよい。最も直接的な慈愛を我々は父母から受け、その次には少し漠として居る様で

師の恩徳

はあるが、同胞人類、社會の輿衆から受ける。この二つの中間にあつて人間に重大の感化を及ぼすのは師の恩徳である。師は所謂る教への親であると共に、同胞輿衆の慈愛を最も直接に代表してくれる人格である。師がその弟子に對する恩徳は、無知蒙昧から我々を智慧と光明とに引き出さうとの慈愛であり、その與へてくれる所は、即ち天地萬般の眞理や、又は人類が相傳へて發達して來た智慧である。生みの親は、久遠以來の身體生命をこの身に傳へてくれ、又之を永遠の未來に傳へる基礎を與へてくれる如く、教への親は、古今に通じた眞理の生命を與へ、我々をして眞理に隨順した生活を營む様にしてくれ、又之を一層明かにして、子孫後昏に傳へる大本を授けて呉れる。眞理の生命、智慧の光りを多く得、又之を傳へる慈愛の多い師は、即ち良師である如く、この慈愛に接し、その恩徳に親炙する心の盛に、又眞面目な者は、即ち善良な弟子である。師弟が學問教訓を授受する間柄は、教場一片の

師弟の關係

學校以外の師弟

教へでなく、實に千古に亘る大道眞理の授受、この間には大慈悲と大信順との冥合同情がなくはならぬ。何れの徳教宗教でも、師弟の相承を重んじて、師道には慈愛、弟子の道には信順を大眼目として、その授受の肝要な場合の儀式を營んだのも、此のためである。佛教では之を授記と唱へて、弟子は師の足下に跪いて頭面足禮し、師はその頭を撫でて成道の要契保證を與へる。師弟の關係は精神上の親子であり、慈愛はその間を融會する甘露である。但し茲に師弟といふのは、直接に教育關係に成り立つた師弟を指すのみでなく、その間柄を擴げて云へば、天地萬有も、社會の輿衆も皆、或る意味では我が師である。蘇東坡が、山色に金身の佛を見、谿聲に如來の廣長舌を聞いたといふ如き點まで行かすとも、ニュートンの眼前に落ちた林檎は、之を眺め、之を考へ、之を信奉したニュートンに取つては物理の師であり、空翔ける鳥は、之を仰ぎ見て之を學ばうとする人間にとつては、飛行器發明の師であ

つた。それに加へて、日々我々が接する同胞人類は、その言語、動作、態度に於て、互に相感化し相教へつつあるので、兒童があらゆる人の口元を観察して、その言葉を真似る如き場合には、教へるものは無心でも、之を受ける方から見れば大なる師匠である。その他人間の心情を養ひ、知識を啓く上で、家族、部落、都會、國土、皆各々大きな教育者となつて、日々刻々にその子弟を教導し、子弟は又その門人となつて二六時中その教へを受けつつある。教ふる者、教へられる者、共に無心であつても、社會はその様にして一つの教育者としてその慈愛を垂れ、その慈愛に接する者は日にその益を受けつつある。この教への授受は、一に人間相互の同情同感に依つて行はれつつあるのであるから、此等の自然無心の教育も、直接師弟の關係と同様に、慈愛の方で行はれて居るのである。直接なり間接なりに受ける教育感化の恩徳を思ひ、之を仰ぎ之を信ずるのは、即ち人々が自らの感受性を擴充して、自らの

人格を大にする路である。

君王の恩徳

同胞の同情と師の慈愛とを兼ね備へ、之に愛護の徳を加へたのは即ち君王の恩徳。何れの社會でも、君王は族長又は司祭長としてその部下を愛護し教導するから起り、それに兵馬の威力と司法の權威とが加はつて、完全に君主となる。族長の慈愛を源にして之を一切人民に及ぼすのは、即ち親の徳の發展であり、司祭長の慈悲教導を社會萬般の事に及ぼすのは、即ち師の徳を擴充したものの、兵馬や司法の權も、この慈悲恩徳に基いて始めて誠に君王の徳として行はれる。親が子に與へる生命は、その人の獨創でなく、萬古以來の生命であり、師が弟子に授ける教育は、その人の專賣でなくて、永遠不謬の真理である如く、君王の慈愛も亦、古今を一貫した恩徳であるから、君王の相續は血脈相承けて、世々の君徳が一系の血統と一貫の理想で貫く様になつて始めて完全となる。此に於て君王は一國を支配し愛護して來た大慈愛の化現、代

表者となり、我々の親も、親の親も、その君王の下にこの生命を傳へて來たのであり、師や師の師も、皆この國の文明の中に、その教育を相續して來た事になり、此に於て君王は、又擴げて云ふ意味での我々の親であり師である。勿論一國一時の君王を一人一人取りて、一個人としてその人格を吟味すれば、親の慈愛で民を子とする人ばかりでなく、又我々の師と直接に仰ぎ得ない人もあらう。然しながら、君王の徳は個人としての徳でなく、その脈々相承の徳にあり、我々の之に對する敬愛、信順も亦一個人としての我れから出るものでなく、祖先以來臣民としてその恩徳を被つて來た連續の一員としての信順である。支那では天地人を一貫するを王と云ふが、尙之に加へて云へば、古今を一貫して三世に亘るのが王である。世界には革命の國もあるが、此は君徳が三世を一貫せずに、時に從つて變轉するためであるから、君王の徳が不全な國である。それ故、何れの國でも君王の理想の發達した國では、

——シャールマン以來のロマ帝國や、キリヤム征服者以來のイギリスの如き、——何かの連續に依つて君王系の一連一貫を建てやうとして居る。然しそれ等はまだ單に理想の聯絡に止まつて、事實實證の一貫になつて居ない。事實上の一系一貫はこの日本國に具體的に現はれて居るが（此の事は國體に就いての別論に譲る）兎に角完全な君徳は、此の様に一貫の慈愛を基本として成り立つ。支那の如き革命の國であつても、明君といへば即ち仁君で、民を愛する事子の如き君王であり、日本の皇室の如きは、いつでも民を子とすると共に、又之を教化し教導する師主である。今上陛下の御製だけを見て、この君徳はあらゆる方面に發露して、陛下の大御心は、常に祖宗の御心と通ふと共に、又臣民の精神と一氣相通じて居る。

眼に見えぬ神の心に通ふこそ

人の心の誠なりけり

の御詠の如きは、天地人一貫の君徳、三世換はらぬ人の心を直に 陛下の御心とせられる大慈心の明白なる發表である。何れの國、何れの世にも、君王の心は此にあるべきであるが、特に日本國、特に又今上の御高德を仰ぎ得て、尙君王の慈愛を思はない者があれば、國民としての資格だけでなく、人間としての心を失つた者である。

* * * * *

慈愛は人生の根本生命であつて、之を無心の方から云へば、自然の調和、有心の方から云へば、同情、信愛。勿論天地人生には、調和を失つた現象も生じ、慈愛や同情を破る行爲も少くないが、此等はその一部に慈愛を體得しない者が生ずるため、そのあるべき状態以外に出るから、この不調を治める方法として、一時は調和をも破るが、しかしその極はやはり調和に立ち戻り、人間でいへば同情のない行爲がいつでも一層の調攝に進ましめる。明白

調和の破
壊とその
救済

な實例で云へば、天地の風雲は空氣の壓力工合の不平均を回復するために起るので、大調和のための一時の不調和であり、身體の病は、化膿でも發熱でも、皆大調和のための現象である。(此は即ち今日病理學の根本概念であつて、特別に病的現象といふものを認めず、病もやはり生理作用から出るとする生理的病理學の立つ所以であるが、茲には詳論しない。)人間の惡徳といふのも、此と同様であつて、人間相互の同情がよく慈愛の調和關係を保つのは、個人が各々その分を守るので出来る。親は親としてその子を養育すればこそ、親であり、子も亦同様、子たる孝徳を盡せばこそ子である。その他、君臣でも夫婦、朋友でも、皆同しであつて、朋友は互に相依り相助けるのが本分であるのに、若しその一方が自分だけの利のために他を利用すれば、朋友の關係は破れる。親が自分の目前の快樂のためにその子を棄て、子が自利のために親を顧みず、夫婦各々我を張り、君臣互に他を方便にして之を利用すれば、

その間の同情は破れ、慈愛関係は行はれない。此等の不徳、不調、亂能が生ずるのは、却て人生が實に同情慈愛で成り立つて居る反證を與へるもの。

同情が自然の本分に從つて行はれて居る間は、人生は平和であるが、それが一分でも損しては、直に調和が破れ、忘恩の人は直に破徳の人、破徳の人は即ち孤獨憤懣の人となる。敗徳貪戀、孤獨、憤懣は、即ち人間が人生の慈愛から排斥せられたしるしであり、此の如き人間が人間仲間の排斥を自然に受けるのは、恰も人體の中に這入つて來たバチルスが白血球に攻撃せられると同じで、その結果化膿して痛みが生ずるのは、即ち身體に生理上の大調和のあるしるしである。此等の消息を観じ來れば、人生は慈愛の調和で出來て居る事は確かであるが、而かもさういつて、何事も自然のまゝに棄てておいて、慈愛が十分に行はれると樂觀し安心してはならぬ。所謂人心危く道心微で、調和のための生命は、忽に分外に我意を張る生活にもなり、慈愛の意

不調和の
排除

慈愛の濫
用

志は、動ともすれば愛の濫用に走る。『傀儡子、首にかけたる人形箱、佛を出さうと鬼を出さうと』その機實に一髪で、慈愛のための心は一步偏愛となつては、調和を破る我慾となる。水には流動性があるから、水平を保つが、又そのために波瀾をも起し、人の身體は生理作用を營む様に出來て居るから、又、それが直に病態をも惹き起し、人は互に恩徳で生きて居るから、恩徳の濫用誤用が直に破徳となる。然しながら此の様な危険があるからといつて、少しも悲觀する要はない。破壊があり得るから、根本の調和が一層必要になり、破徳が生じ得るから、その根底になつて居る慈愛を、我々人間は自覺する要が生ずる。道は自然に行はれても、その自然を意識し、覺醒して道に隨ひ道を踏む、此が人間の品格であり又特權である。大道廢れて始めて仁義があるといふのは、自覺のない無心界を標準にしていへば眞理であり、又慨世者の言としては同情すべきものであるが、泣いても笑つても、人間は意識生

慈愛と權威

活に生まれて来た以上は、その意識を明確にし、自覺の覺醒に依つて、人生の大道を踏み、又その慈愛調和を尊重すべきである。

慈愛恩徳
の秩序

此に於て慈愛恩徳の關係と相補ふべき他の一面に着目する要が生ずる。それは即ち同情も一定の關係程度に従つて眞に慈愛恩徳となるといふ大切の消息であつて、この關係は、即ち天然の法則となり、人生の秩序となつて現はれる。親の慈愛は子の生命に現はれるが、生命の相承傳道には一定の法則があり、親子の關係は、この生命の法則を、親と子との相愛同情に現はして、茲に秩序となる。親の親たる慈愛は、先づ盲目の衝動で生殖の慾となつて發表するが、此の慾を正當に行ふための夫婦關係は、人生秩序の根本中心になり（結婚を神聖とし、多くの國で之を宗教的にするのは此のため）その濫用はあらゆる惡徳の端緒になる。茲に親の慈愛が發動するに當つての初發の秩序

が見えるでないか。それに次いで、懷妊、出産、養育にも各々その關係工合が定まり、之を正當に天然の法則に従つて案配すれば、親はその生命の相續者たるに適する子を得、その案配を誤れば必ずどこかに不都合を生じて、親の慈愛も缺陷のある結果を生ずる。可愛い兒だといつて、親の愛が濫愛になり、食ひ過ぎさせたり、着せ過ぎたりするのは、養育の道でなく、愛が過ぎて子を放蕩にする母親も世間に多いなど、皆親の慈愛がその秩序に背いた結果である。人間の身體だけで見ても、その中の礦物質、植物質、動物作用の案配は、年齢と状態とに應じて一定の秩序があり、その間の調和を失はない處に健全の生命はあり、又天然の賜である美味、天地の甘露たる美酒でも、過度に用ひては忽に害を生ずる。進んで社會同胞の關係で、現代文明の宿題である労働者と資本主との關係でも、調和の關係を保ち、同情で相寄り相助けな

いから生じた難關であつて、資本の過度な蓄積は労働者の疾惡を招き、労働

者の要求は資本主の反抗的壓制となつては、慈愛の恩徳はその間に行はれ得ない。師弟の間柄でも、君臣の関係でも、慈愛同情がその當を失し又は足りなければ、忽に破綻を生ずるもので、世の常として師には慈愛の足りない事が多く、君には偏寵の愛があり、そのために弟子はその順の徳を失ひ、臣には不臣をも生ずる。此等は皆、慈愛恩徳の秩序が當を失するから起る事であつて、些少の失當が大なる破綻にもなるのは、即ちその秩序が精細又嚴明であるしるしである。

法則秩序

法則と秩序は、同情慈愛の意志を照らす智慧の光明である。今の科學者は、天然現象に法則のあることを知るが、それは即ち人間の理性と相照應する天地の智慧たる事（この點は『復活の曙光』第一章に譲る）を見ず、又倫理學者は善惡の規矩を人事の配合や社會の狀態などに求めて、それ以上更に人生の基本になつて居る大道秩序を思はない。教育者が忠孝を説きながら、古

法則秩序
と理性

今に通じて認らず、中外に施して悖らざる大本に對して風馬牛であるのも此の様な世には自然の結果かも知れない。然し議論や理窟でなしに、現在事實の世界に、慈愛と共に秩序が嚴存して居るのを見れば、我々はこの秩序を、我々人間の理性に寫し取つて見なければならぬ。天然の法則といひ、道德の秩序といふものが迷ひでなくば、又その大本が氣まぐれに動くものでない以上（氣まぐれならば法則でなく秩序でない）我々はそこに不變の大道が行はれて居るのを諦認し、而してそれが人間の理性と契り合する以上は、又その大本に人間の理性と同様で、又恐らくそれ以上の宏大に且つ賢明な智慧のあるを見なければ濟まない。その智慧を神智天意といふか、道といふか、又は理、又は法、その名を定めずとも、兎に角我々の理性と相照らす大きな智慧の光明が萬有と人生の秩序の中に行はれて居るに違ひない。此の智慧は賢明であり嚴格であり、且つ一切萬有に遍く、且つ三世を一貫して居る法則とな

つて現はれるから、我々人間は之に對しては、之を仰ぎ、之を尊び、之を信じ、之に順ふべきである。己むを得ずにいやく服従するのではなく、信服するのであり、何か譯も分からずに盲従するのではなく、理性に訴へ心を打ち明けて信順するのである。一言でいへば、權威として之に信順し之を奉行するのである。權威といふのは、壓制の暴力でなく、強者の權利でなく、峻嚴犯し難く而かも慈愛心服すべく、賢明味まし得ず、且つ同情篤く、三世を一貫して變改しないで、而かも妙用盡きない秩序、此が我々人間の理性に對して權威として表はれる。慈愛に對する感恩は、本能的に自發にも動くが、權威に對する信順は、理性的に秩序法則を重んじて之に隨順する賢明の行動である。

慈愛融和、同情交通で、天地は運行し、人は生々し、而してその間に行はれる秩序が、天然にあつては法則、個人にあつては理性、社會にあつては徳

教となり、此等が即ち信順すべき權威として行はれて、茲に天地人生はその歸着を得る。さすれば即ち、慈愛のある處には必ず權威があり、權威の行はれるのは慈愛に基かなければならぬ。親が子に傳へる生命は、第一には慈愛として發動し流行するが、この生命は、兩親たるものが勝手に作り出したものでなく、實に過去久遠以來生々流行して來た大生命を、後代に傳へる契點であり、子は又之を己れ一個の私有として貰つたのでなく、實にこの生命の長く遠い流れを汲むで、之を後代に發達するために頂戴し拜領したものである。故、親たるものがその生命を子に傳へるのは、一方慈愛の發動であると共に、又久遠來變らない大生命の權威を代表して居る。子が親から養育の恩を受けるのも亦、單に愛情に信賴してその徳に浴するだけでなく、この權威を仰いで之に服従し、信順の誠を盡してその委託に背かない事を期すべきである。

孝の徳には、慈愛に對する至情と共に、敬順の誠がなくてはならぬ。師弟の間

柄に至つては、權威と信順との關係は一層明白であつて、世の人は往々、その間に存すべき慈愛を見ないで、權威の方だけを考へ、そのために師弟間の亂調を來す位。然し師弟の間にも慈愛が根本となるべきは、先に述べた通りであつて、その慈愛が特に道を傳へ、教を宣べ、理と智とを與へる作用となり、其の教化教導は即ち古今に通じて謬らない大法大道の權威として行はれる。二と二とを加へて四つになるといふ事一つ教へるに當つても、師は此の一事を眞理として、即ち太古以來不變の道として之を教へ、弟子は之を承認し、信順して教を受け、此の如くにして始めて教育は行はれる。教育の權威は、師匠自らに始まつたものでなく、實に久遠來の權威であり、師たる者の人格がこの權威を代表するに足るものであつて、始めて十分に行はれる。生みの親は、久遠來生々盡きず、堂々と相續く生命の權威を代表し、教への親は、同じく久遠來一貫して秩序を謬らない眞理の權威を代表する。

君王に至つては、親と師との慈愛權威を兼ね具へ、而して之に加へて君王に特有である司法權と兵權を具へる。司法の權は、社會の秩序を維持して正しさを養ひ、不義を懲らす作用であつて、兵權は即ちその教化に服しないものを征服する權能。之を人間の身體に喩へていへば、親と師との力作は、消化や循環の榮養作用であり、司法と兵力とは、發汗や排泄、それから生理の不調を對治する發熱の如きもの。而して此等が宜しきに應じて行はれるのは、生命の力、その先天自發の作用、他の何者も勝手に之を作り出す事も出來ず、又變更する事も出來ない秩序力作。先天自發と不變の秩序と、そこに權威の源泉がある。古代の社會でも既に、君王の兵權と司法權とが神權であるとして居るのは、此のためであつて、神權といふのは即ち一々の君王の人格が現はれるに先つて存在する神聖の權能といふ意味。君王が出來て始めて此の權威が生ずるのでなく、君王の君王たる所以は、即ちこの權威に依ると

いふ事である。支那では此の權威を天命と解釋して、君王は特に刑罰を惟れ謹むといふ點を明白にし、日本では即ち天祖の御委托使命として、神人を司收する權能は、世々の天皇の御世が始まるより前から行はれて居る。君王の權威を説明するには、各國その國體の異なるに従つて、幾何の違ひはあるにしても、その權威が先天に、即ち一々の君王の人格に先つて存在し、その一の君權發動の源となるものが先天的に存在すると解し又信じて居る點に於ては、全く一つである。能く統治し善政を布く君王は、必ずこの權威の思想の明白な人であり、その臣民の忠義は、又此の權威に對する信順悦服の厚いだけ、それだけ完全な忠になる。忠君は單に服従でなく、一方慈愛の恩德に對する至情と、一方千古を一貫した賢明な秩序、大道の權威に對する信順である。君權を解釋して、盲目的に絶待として人の屈從を強いたり、又は強者の權利の成り上がり、猛獸の如き權力と思ふなどは、實に君權の眞由を知ら

君王の權威と臣民の忠義

ない没道義の政治論である。世の中には、その様な力で君王となるものもあるであらうが、此の如きものは眞の王者でなく、征服者、覇者、或は篡奪者に過ぎない。名は王といつても、實は王でない。世界の中には此の如きものを王として戴いて居る國もあらう。然しその様な國であつても、一旦それを君王とした以上は、やはりその君權の源泉を、單に征服の暴力だけとせず、大道に基いた君王の權威に基いた如く解釋して後に、之に服従せやうとして居る。ローの皇帝神位や、支那の帝王天命説の如きは、その適例であつて、その解釋が人心を支配する間のみ、その君權は實際に行はれて居る。事後に作り上げた解釋ですら、これだけの勢力があるのは、即ち君王の權威が如何に尊嚴であるかを示して餘りあるもので、まして眞に事前にこの權威の具はつた君王があれば、それこそ眞に權威を具へた君王である。臣民の忠節も此の如き君王に對してこそ眞に忠順の誠として行はれ、久遠の大道に基い

た忠義として行はれ得る。

* * * * *

忠孝信

かく見て來れば、天地間萬物の生命は、皆共に、同情融會の關係でその生々を營み、此の關係は萬古一貫の秩序に依つて行はれ、同情融會は人生にあつては慈愛の恩徳と、之に對する感恩の情となつて表はれ、その大道秩序は、權威となつて、司收教化の作用と、之に對する信順歸敬の誠となつて表はれる。而して慈愛と權威とは、人格としては親と師と君となり、感恩信服は、親に對する孝、師に對する信、君に對する忠となる。孝の心をおし擴めて來れば、萬事について始めに返り本に報ひる愛情慈悲の徳となり、信の心は即ち延びて、總ての人を理會する力にもなり、眞理探求の心にもなれば、道に殉ずるの烈誠ともなる。忠の心は即ち總て正を敬ひ、義に殉ふ心、理想に進み本分を忠實に盡す誠になる。『源遠ければ流れ長し』の理りで、人生の道徳

は萬物生命の根源に溯り、その慈愛と權威とに源泉を汲むでこそ、始めて遠く又大きな實力となり得る。この力は孝と信と忠との誠として、根幹と枝葉と共に、その處を得、本末經緯共に共にその美を成し得る。

六 個人の信念と傳來の權威

人生と人
格

人生は一方慈愛調和の舞臺であると共に、その調和の秩序を具へ、この秩序は權威となつて個人を支配する。勿論何事の信念にしても、精神がその憑據であり、個人の人格を没却しては、慈愛も成り立たず、權威も行はれない。然しながら個人は、その身體にしても、精神にしても、己れ獨りで生存するのではなく、身體には父祖傳來の生命が宿り、精神は教育や社會から承け得た知識徳操で成り立つて居る。先にも述べた如く、個人は人生の革新性を代表し、社會は繼續性で成り立つが、この繼續は又革新の新又新な發達があつて始めて、生命を得ると同時に、革新は繼續の一部一節として意味あることになる。それ故に個人は、その人格に於て冒すべからず、その信念に於て水

人格の源
泉根柢

火にも犯されないものがあるが、而かもその人格の信念は單に現實の内容だけに出て來て居るのでなく、大きな慈愛の中に生き、又個人の生死以上に亘つた權威秩序に隨つて生きて居るのである。即ち個人の人格は現前の事實であるが、其の事實に先立つて存在せる秩序理法があり、此の理法は、或は科學の眞理として、或は道德の命令として、人間を支配する。此等の理法命令は、個人が作り出したのではなく、個人の生存すると否とに係はらず、又これに服従すると否とに係はらず、個人を強制する方がある。例へば、人間の身體は一定の溫度の範圍内で維持出來るものであるから、個人は多少はこれに對抗し得ても、遂にはこの理法に服従して生活の條件に順應しなければならぬ。或は又親に對して孝養を盡すのが、面倒だと云つても、社會の道德は親不孝を否認するのみならず、其の人自身の良心も矢張り、何處かに不孝を答める聲を擧げる。所謂風樹の嘆は、親の死んだ後に誰も抱く心であるが、親の

生きてゐる間にも、不孝の子には、往々にして其の心持ちがある。此くの如き心持ちは即ち個人の我儘に對する權威の發動であつて、人間萬事、事前の理に依て動いてゐる以上は、現實の事柄は、此の理に服従しなければならぬ。

事前の理と云へば頗る漠然なやうであるが、而かも其の勢力が事實人生を支配してゐるのは、争ふべからざる事實である。然しながら、天然の事にしても、唯理が行はれて居ると云ふだけでなく、個人の精神が科學的研究に依て其の理を悟るやうになれば、この理に従ふ人生の活動は意識的に明瞭になり、従つて權威は人間の確信に依て明かに認められる事になる。又道德の法則の如きも、各國各々特性があり、時代に依て道德思想の差別はあるが、人類の道德として、最後には動すべからざる權威がある。又各國には、その國體國民性に應じて、其の國の古今に亘つて變はらない道德的要求があり、この要求が或は社會の傳承として、或は教育の方針として、個人を支配する。

事前の理
とその意
識權威と服
從

國民の道德は、其の國の歴史事情に應じて、自然に行はれはするが、國民がこれを國民道德の權威として服従し、國家の永遠なる秩序としてこれを遵奉するやうになつて、初めて意味あり、信念ある國民道德となる。

此くの如く觀て來れば、人性の權威は事前の理に基き、國民の傳來氣風に現はれ、個人以上の生命を保ち、従て個人以上に立つてこれを命令する力がある。然しこれに服従する個人が、其の意味を領解し、權威の源泉を尊重して、これに服従するやうになつて、初めて眞の權威となる。

個人の信念と傳來の權威とは、此くの如く密接に相助け相依らなければならぬ。然るに現在の思想界には、一方に個人の人格を無視して權威を壓抑の方にのみ用ひる氣風と、個人の信念を主張して、權威を無視する傾向とが、相衝突して居る。一言で盡くせば、權威の失墜は、現實主義の結果である。現實主義とは、唯現在の感覺を頼みにし、物事の表面のみを觀て、其の根本を

權威の失
墜

探らない氣風。即ち先きに云つた如く、差別のみに拘泥して、平等を考へない氣風である。

此くの如き現實主義の風潮は、年來日本の社會全體、並に教育社會を支配し來つた勢力であつて、それが爲めに、何事に就ても、事の因で出る源を探らず、唯現在と少しばかりの將來を考へる。其の爲めに、總べての思想が淺薄になり、總べての活動が盲目的になる。例へば天然の研究、即ち科學の研究だけに見ても、現在の教育は、其の結果を教へ、其の所謂真理を二種の宗義の如く教へるのみで、其の真理を研究した人々の苦心、或は偉大な理想はこれを考へない。そこで學校の教育では、科學の真理を確かなものとして、其の結果を傳へはするが、此等の如き結果の依り出で來た源に就ては一向考へない。例へば物體運動の方則は、今日の物理學で十分に分かつてゐる。大は天體の運動から、小は石礫一つの轉がるまで、皆一定の法則に従て居るの

であるが、今の科學教育ではそれが明白になつた結果だけの表面を見て、事等の理法を發見した人々の精神を汲まず、又一層進んでは此等の研究が出来る前にも、其の理法が天地の間に、誤りなく變りなく行はれてゐたと云ふ真理の根底を見ない。事後の結果を見るのみであつて、事前の理を無視する。此くの如くして、今日の思想界、教育社會には、總べて物事の見方が現實的になり、分析の一方に偏し、思想は淺薄に非れば、輕率になる。獨り天然の事物に對してのみならず、人間道德の事に對しても、同様に、現實の方面だけを見るから、道德は方便となり、規則となり、實利主義が人生の理想を掩ひ隠すやうになる。源遠ければ流れ長しと云ふ理を見ないで、目前の差別相に囚はれる。現在に對して、此のやうな見方をするから、將來に對する希望は弱くなり、抱負は低くなる。

人は如何なる位置に居り、如何なる事業をするにも、先づ自分の人格を中